

山梨県北杜市古林第4遺跡における縄文集落分析

今 福 利 恵

はじめに

1. 古林第4遺跡の概要
2. 分析の方法
3. 土器型式の分類と変遷

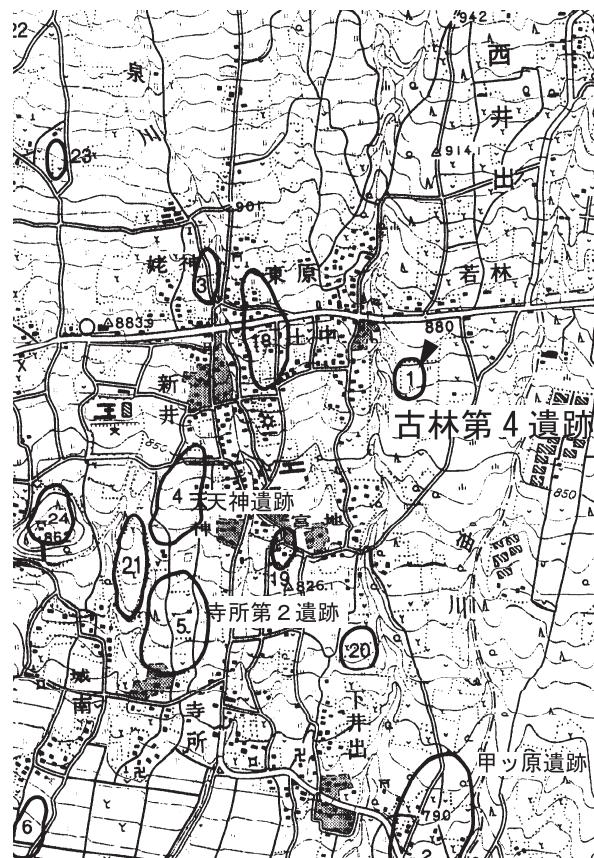
4. 集落内における型式の動態
5. 住居跡毎の各型式の出土状況
6. 住居跡毎の各型式の組み合せ
- まとめ

はじめに

縄文集落研究において土器型式研究の成果は出土土器からみてその住居跡の時期を決定するための物差しとして使われる。ある住居跡から出土した土器群は細分された土器編年に照らし合せて時期が決定され、住居に土器が付帶した施設があれば住居の時期とし、また覆土中の土器は住居廃絶後であることから住居そのものとは若干の時間差があるものとして理解される。土器型式の一時期の時間幅内に住居の使用時と埋没中へ投棄される時間が取まる場合もあれば長期にわたることもあり、住居がもつ時間幅と土器型式とのそれとは異なっている。その時間幅はせまいものとも理解され、住居跡覆土中の出土土器から住居の時期を決定してもそこには土器型式による時間差は微たるもので、土器型式による時間幅内におおよそ収まるものと理解されてきた。しかし遺跡調査において遺物の出土状況や接合関係をみていくとその差は無視できるものではなく、遺構間のわずかな時間差をとらえることができ、集落内の遺構変遷が再編可能であることが示されてきた（小林2004）。集落内における遺構の段階的な変遷ではなく、遺構のライフサイクルをフェーズという概念で階梯的にとらえ直し、一時的な集落景観を検討していく。こうした実証的な分析はこれまでの環状集落のとらえ方に見直しをせまった。しかし膨大なデータを背景にした環状集落論（谷口2005）に対して意見が一致しないまま対立し、膠着状態に陥ってしまっている感がある（安孫子2011、黒尾2012）。実証的な先端研究は発掘調査時に膨大なデータ取得が必要であることから分析がおこなえる発掘事例は限定される。調査時のデータがあったとしても膨大な作業量の前に再検証は事実上困難であって、ならば既存の膨大な発掘事例から分析していく方向を見据え探っていくかなければならぬ。

ところで土器型式の研究はもはや編年研究ばかりではなく土器型式個々の出自や系譜とその展開といった系統性を検討していく方向にあり、その成果は微に入って進展している。時間差のみでなく一様式内で多様な型式群・類型群の抽出と認識そしてその変遷、消失、派生など、

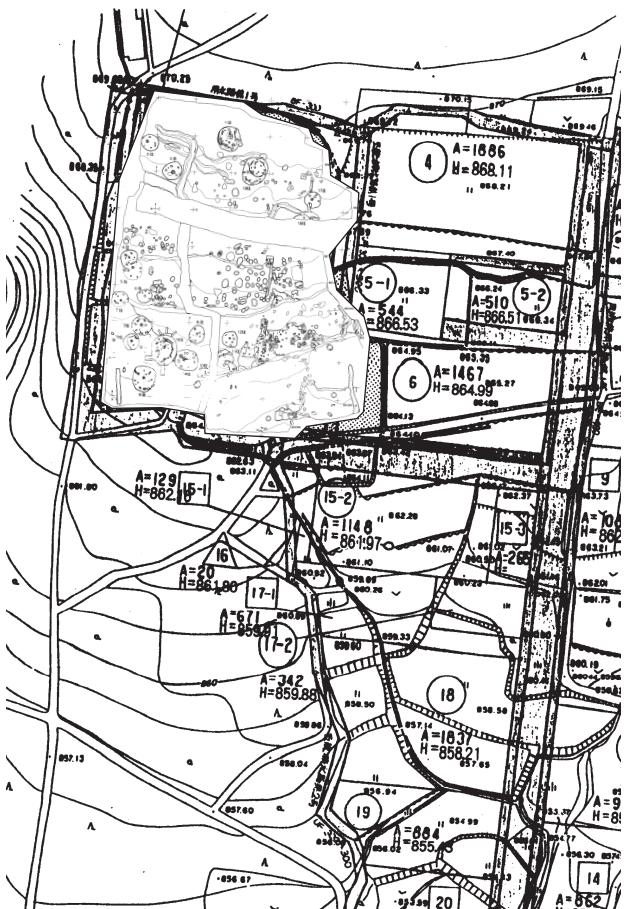
土器自体そのものの動態が明確にされてきている。こうした方向性は時間の目盛りの細分だけではなく、分布圏内の展開や他地域との影響関係といった詳細な歴史をとらえるにいたっている。しかしこうした研究成果は分布圏となる一定地域での現象をとらえている意味合いが強く、そこでの基本的な単位となる集落研究に対しては反映されているとはいがたい。集落を構成する住居跡からは多様な土器型式が組み合わさって出土している一方で、ある型式が欠落していたり、断続していたりと土器は時期決定のみならず出土状況をみていけばそこに暮らした集団についての多様な情報を持ち合わせていることがわかる。ある土器型式が集落内でどのように時間的



第1図 古林第4遺跡位置図

な変化と広がりをみせているのか、それが他の土器型式とどのような関係にあるのか。こうしたある土器型式毎の系統性についての成果を一集落内において検討していくことは、縄文集落内での個別集団の分別やその動向をとらえていくこととなり集落研究を広げていく可能性がある。ならば集落を土器型式で分析していく方法を考え縄文集落の一端に迫ってみることとしたい。

対象とした遺跡は、山梨県八ヶ岳南麓となる北杜市の古林第4遺跡とした。報告書は2回に分けて刊行されており（大泉村教育委員会1999、2002）、出土資料も北杜市考古資料館にて一部公開されている。報告書には、住居跡毎に遺物の平面および垂直分布ならびに接合図が、また遺構間接合図も提示され、詳細な土器の出土状況がわかる。遺跡は中期中葉の勝坂式期の住居跡20軒ほどの環状集落とみなされている。集落のほぼ全体が調査されており、未調査区域はおそらく少ないものと推定できる。また住居跡どうしの重複もほとんどないため住居単位での出土遺物が明確である。時期的には、比較的短期間の集落でおおよそ9段階の変遷にほぼおさまっている。手始めにこうした比較的単純な集落遺跡を検討し対象として選定した。



第2図 古林第4遺跡調査区全体図

1. 古林第4遺跡の概要

八ヶ岳南麓の中期中葉の勝坂式期に限定された住居跡20軒の環状集落を呈する。標高867～870mの尾根状の先端に位置し、西側に甲川が南流する。なお調査担当者の伊藤公明による集落分析成果がある（伊藤2006）。伊藤の所見では、住居跡配置と土坑群の群別により二分し、北群の7軒と南群の13軒の住居跡から構成されるとしている。住居跡の時期について、埋甕炉などの住居に付随する土器が伴う設備がすべてにおいてみられない。このため土器から遺構の時期を決定することが基本的にはできないが、伊藤は覆土中のもので主体となるものあるいは混合している場合は新出段階の土器から時期決定している。そして集落は私の編年（今福・閨間2004）に準じて藤内2段階に始まり藤内4段階まではすべて南群に属し、井戸尻1段階ではすべて北群、同2段階で北群と南群、同3段階では北群という変遷を示している。遺物の接合関係で、住居跡間の接合は23例あり、北群の1号住居跡と南群の16号住居跡がその中心となっているが南北間では1例のみで各群内での接合関係で完結していると指摘している。この接合関係についてはまた後に触ることとする。

2. 分析の方法

分析に当たっては古林第4遺跡の縄文土器を出土単位である住居跡に關係なく、すべて型式毎に分類してそれを編年していく。土器編年については最も詳細な新地平編年を基本に型式学的に分離された細分による時間幅とする。ある集落において土器が型式学的に時間幅を有すると認められるとき、住居跡出土土器が複数の時期にわたっていることがある。出土状況一括例で型式学的に前後段階が混在する状況については、社会的に意味はあっても累積の結果であって理論的に分離された時間細分を主軸にしていかなければ先後関係は重複し正確でない。現象の多様性を並べるのではなく型式学的な時間序列にしたがうことで累積を整列させていくこととする。よって住居一括資料といった時期決定ではなく、出土土器個体毎に時期を決定した。土器による住居施設がない限り覆土中の土器のみによる住居跡の時期決定はできないものと考える。

編年は新地平編年に準じた私の編年（今福2011）を基本にした。古林第4遺跡の出土土器はほぼ勝坂式期全般にわたるが、型式分類やそれぞれの系統觀についても同じく踏襲する。勝坂式土器の細分は、おおよそ四期の変遷として猪沢式期、新道式期、藤内式期、井戸尻式期の順に新しくなりさらに各期を細分したものである。古林第4遺跡では、猪沢式期、新道式期にはじまり藤内1段階から2段階、3段階、4段階、井戸尻1段階、2段階、3段階までの連続した七段階を中心に展開する。住居跡には埋設炉などひとつもみられず、遺構そのものの時期決定とするための土器はなく、すべてが覆土中のものと

なる。よって住居跡じたいの時期決定はなしえない。ただし住居跡間での接合関係が多くみられる。

住居跡出土土器については、報告書では一般的に遺存状態のよいものから小破片までが掲載されるが、意図的な廃棄と混入を分けて考える必要がある。住居跡覆土中から出土したものはおおかた意図して廃棄されたものとみなすことができ、そこから有意性を読み取っていく必要がある。よって偶然に入り込んだものは排除していかなければならない。そこで恣意的ではあるが、実測図として掲載された比較的全体像のわかる土器を意図的に廃棄されたものとみなし、拓本図等による小破片は原則対象としないこととした。

また、ある系統性をもった土器型式が一つの住居跡覆土から時間幅をもって出土することがあり、こうしたことから捨て場が決められている可能性が示唆される。住居跡一括出土例は、型式毎のセット関係も重要であるが、セット関係は一定しておらず、かたよりがみられる。さらにある系統性をもった土器型式が一時期に複数の住居跡から出土する場合は、同時に複数の捨て場があるということになる。住居跡覆土間で意図的な廃棄と認められる資料で接合関係があれば明確である。ある土器型式が複数の時期にわたってそれぞれ異なった住居に廃棄されているならばそれぞれの時期毎に捨て場を変えているとみなすことができる。つまり前提として住居跡に土器を廃棄するにあたりどこにでも自由に捨ててよいのではなく、土器は捨てる場所が決められている、と考えておく必要がある。ある居住施設において廃棄場所は一ヵ所であると想定することは可能である。もし複数ならば複数箇所間における土器の接合関係が多くみられることとなるが、実際こうした例はかなり少ないといわざるを得ない。廃棄場所は一ヵ所でも異なる居住施設と共同の廃棄場所ということは考えられ、複数の居住施設から廃棄物が持ち込まれれば遺物量は特段に多くなり、集落の中である住居跡のみ遺物が大量に出土するという例は少なくない。こうした共同の廃棄場所はいわゆる土器捨て場などが知られており、住居跡になされることもありえるといえる。しかしこうした場合においてもある特定の居住施設による行為に限定されるものとみなしておく。なお住居に付帯する埋甕などの施設はその土器型式と住居との関わりがつよいものとみなしておく。住居跡出土の土器型式セットに有意性を読み取るにはこうした前提が必要となる。ランダムに廃棄された結果であれば住居跡出土遺物の一括性に意味はないものとなる。

まずは土器型式によって一集落全部の土器を型式学的な時間に配列し、また型式学的な系譜関係による時間的な展開を整理する。型式をある集団に属するものと置き換えた場合、集団の発生、分裂、結合という動態があればこれに連動させて考えていく。まずはある型式が通時にどのような遺構に廃棄されているかを整理しておくことで集落内の集団の配置が明らかとなる。また一軒

の住居跡から出土する複数の型式については、その型式間ににおいて捨て場が共通しているので結びつきが強いとみなせる。よって住居毎のセット関係とその通時的变化を整理した上で検討を進めていく。

3. 土器型式の分類と変遷

土器型式は重三角区画文土器、パネル文系土器、楕円区画文土器、抽象文土器、人体文土器、W字状文土器、楕形文土器、縄文系土器、さらに鉢形土器、浅鉢形土器、有孔鍔付土器などがみられるが、主となるのは重三角区画文土器、パネル文系土器、縄文系土器であり、古林第4遺跡内では比較的長期にわたってみられる。パネル文系土器には口唇部直下にシャンプーハット状の隆帯をめぐらせる一群があり、本来分けるべきものである。他は数量的にさほど多くない。また多喜窪タイプなどいくつかの型式は欠落しており、型式内容には勝坂式土器全体でみれば偏りがみられる。なおこの分析において鉢形土器、浅鉢型土器、有孔鍔付土器などは時間的な位置づけがうまくできなかったため対象から外した。各型式においてはそれぞれ文様帶の有無や主文様の形態、器形などによりさらに細型式に分類した。重三角区画文土器は5つの細型式、パネル文系土器はパネル文土器で4細型式、シャンプーハット文様のパネル文土器で3細型式、楕円区画文土器は3細型式、抽象文土器は2細型式、縄文系土器で4細型式とした。分類の詳細は次項の各項目で述べる。細型式の分類により記号はAからXまでの24分類にし、重複すると煩雑になるのでそのまま通じて付した。以上、土器を型式分類したところで細分類をおこない、これに従って個々の土器を編年的位置づけにより整理し配列した。

猪沢式期には抽象文土器が1軒でみられる。新道式期にもサンショウウオ状となる抽象文土器がみられる。しかし、この段階以後は継続しないので、ここに断絶があるものと思われる。藤内1段階には型式が一気に増加する。重三角区画文土器は、新道式期からの重三角区画文にならび横隆線状となるものなどのバリエーションがすでにみられる。パネル文土器は口縁部に文様があるものが初現となるほかパネル文を持たないものがみられる。シャンプーハット状隆帯がめぐるパネル文土器も出現する。また縄文系土器がこの段階から出現し始める。藤内2段階では重三角区画文土器は地域的な特徴となるタマネギ形、横隆線状のもののみとなる。パネル文土器も口縁部が無文となるものや削除して胴部パネル文のみとなるものなど変化に富む。W字状文土器がこの段階から出現し始める。藤内3段階には、パネル文土器は口縁部無文となるもののみとなり他は消失する。シャンプーハットパネル文土器は盛行してくる。また頸部楕円区画文土器が新たに加わる。藤内4段階で、重三角区画文土器に崩れて楕円形となるもの、また再び新道式的な重三角区画文が加わる。パネル文土器は衰退するがシャンプーハッ

ト隆帯パネル文は盛行を続ける。なお人体文土器が加わる。井戸尻1段階に、重三角区画文に菱形となるものが加わるが、横隆線は消失。パネル文土器も消失し、シャンプーハットパネル文土器は盛行する。楕円区画文土器に多段楕円区画文土器が加わる。井戸尻2段階では、多くの型式が消失する。3段階では人体文土器、櫛形文土器、縄文系土器のみとなる。

4. 集落内における型式の動態

同じ住居跡から出土した土器が複数の時期にわたっている場合もあり、その出土状況はまた違う視点からの解釈が必要となってくるが、ここでは複数の累積した時間の中でもまとまりをもっていっしょに存在していることを重視していく。なんらかの要因で複数時期にわるとてもある意志のもとに同じ場所に廃棄させ共存していることを重視するからである。同じ廃棄場所であれば同じ型式の組合せが継続し、なければ異なる場所を新たに選定して移したものといえる。こうして整理したものが住居番号と型式分類番号をあわせて表記した変遷表である(第1表)。概要は前項で示した。さらにこの表に基づいて遺構配置図に時期毎の変遷を示していく。そしてこれらの出土遺構によりまとめると時間的経過の中で出土し

た遺構の移り変わりをみてとることができる。

細型式に分類した土器型式の時間的な変遷を系統的にみていく。これにより細型式の出現と消滅がそれぞれ細型式の関係の中で明らかとなる。そして出土遺構にわけてその系統変遷を追うと住居跡毎にまとまり分裂、統合したりと多様な動態をみせている。これは集落内での型式という集団の配置を意味し、時間的な変遷を反映しているものとみなせる。それらを集落内での遺構分布図に位置づけていくと、型式毎の廃棄場所ではあるが、空間的な動きが時間的にみてとることができる。これらは型式毎にまったく異なる動きをしており、集団の集落内での配置関係を反映しているものと思われる。以下それぞれ型式毎に説明していく。

重三角区画文土器(第3図)

この系統の土器群は集落の初期となる新道式期から集落末期の井戸尻2段階まで継続しており主流となる型式群である。詳細にみると重三角区画文の変形により中途で派生し成立するものや単発的、断続的、また中途で消失するいくつかの細型式がみられ一様ではない。重三角区画文は上に開く半円弧文の下に三角形状の意匠が重なるもの(A)であり、下の三角形意匠がまるく強調され

土器型式別変表

型式名	重三角区画文土器					パネル文土器				シャンプーハットパネル文		
	重三角	タマネギ	菱形	横隆線	楕円	無口	有口	パネル無	胴	無口	胴	パネル無
細型式	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
猪沢												
新道	12											
藤内1	(1.3).16			6.16			3.8	8.16	8		1	
藤内2		10		9.16		2.16	2.5.8.16	2.16	1.16	16	16	2
藤内3		4		16		15					16	16
藤内4	9.16	4.9		9.(13).16	9.13	4					3.4.9	16
井戸尻1	1	2.7	6		2.9	(9)		16		2	7.9.16	9
井戸尻2	1.3	19								3.19	1	
井戸尻3												

型式名	楕円区画文土器文			抽象文土器		人体文	W字文	櫛形文	縄文系土器			
	頸楕円	多楕円	横帯	渦巻	サンショ				口無	膨む	反る	直立
細型式	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X
記号	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X
猪沢				5								
新道				8	12.16							
藤内1					○					8		8
藤内2							8		16	15		16
藤内3	16						15.16			16	15.16	16
藤内4	4		4			16	16		4.9	9	9	1.9
井戸尻1	2	1.(3).6.11	6			2.19	7		6.7.15	2.7.9.10.16	7	2.19
井戸尻2						3		4.19	3.14	3.14		
井戸尻3						17		3.4.18	17			17

数字は住居跡番号
() は推定

第1表 土器型式分類と出土住居編年

て口縁の突起と一体化したタマネギ形状（B）となるものやそこから菱形状（C）、楕円状（E）となるものあるいは上の弧線文が連続した横隆線（D）となるなどいくつかの細型式がみられる。

重三角区画文（A）は新道式期にわずかにみられ、次期の藤内1段階では口縁部の重三角区画文が横方向に崩れた横隆線となる一群（D）が派生する。横隆線となる一群は藤内4段階まで継続するが井戸尻式期にはなくなる。重三角区画文の典型例（A）は藤内1段階以後は中断しきられなくなるが藤内4段階にはまた成立し井戸尻2段階まで継続する。タマネギ状文（B）となる一群が藤内2段階で成立し、以後井戸尻2段階まで継続する。また楕円文（E）となる重三角区画文の楕円形部分が強調された一群が藤内4段階に成立し、井戸尻1段階に多くみられるが、継続しない。連続せず菱形文（C）とする一群が井戸尻1段階にのみみられる。

廃棄場所となった住居跡单位でみると（第4図上表）と、細型式ごとのまとまりが明確となる。新道式期では12号住居跡にA重三角区画文がある。次期の藤内1段階になると16号住居跡にA重三角区画文が引き継がれる。またD横隆線が新たに成立し、6号住居跡と16号住居跡ではAと共に存している。これ以後Aは途切れるが藤内4段階でまたDと共に存し、ADという組合せがめだつ。藤内2段階で成立するBタマネギ文は10号住居跡から3段階で4号住居跡へ引き継がれ、4段階にはADをもつ9号住居跡へも分岐する。この段階で成立したE楕円文は9号住居跡でBEという組合せとなり、井戸尻1段階の2号住居跡へつながる。Bはこの段階で7号住居跡、そして井戸尻2段階で19号住居跡と移り変わっていく。Bは成立以来16号住居跡ADとは無関係な一群となっているが、藤内4段階になって9号住居跡を介してADと関係を持つこととなる。藤内4段階でADという組合せは井戸尻1段階でDは消失しAのみが1号住居跡へ引き継がれ、2段階では3号住居跡へと分岐していく。C菱形文は井戸尻1段階に他の重三角文系とは関係持たずに6号住居跡単独で出現したまま継続せず消失する。AはDとの関係が深くAの消失と共にDに入れ替わりまたAへつながっていくようすがみてとれる。またBはADとはほとんど関係を持たず独立しているが、BEというEとの関係がみられる。CはBに類似するが、関係を持たない。

この関係を住居配置図（第4図変遷図）からみてみると藤内式期までは南側の住居跡群での動きに限られるが、井戸尻式期からは北側へ移動しているのがわかる。ADは9号住居跡と16号住居跡を中心にしており、Bは藤内2段階で出現してからADの周囲をめぐるしく位置を変えているが、井戸尻段階になると北側へ移動する。藤内4段階に再び成立するAは井戸尻1段階に南から北の1号住居跡に集約していく。重三角区画文土器だけの動きでみると当初から環状配置を意識しておらず南側に偏っており、移動の経過となる井戸尻1段階で南北に広

がっていき、2段階には北側に集約されたあり方を示している。

パネル文系土器（第5図）

胴部に懸垂隆線による主文様とそのあいだを埋めるパネル文を特徴とするこの土器は、口縁部に内湾する無文帶をもつパネル文土器と、口唇部直下にシャンプーハット状の隆帶がめぐるパネル文土器の大きく2つに分かれ。両者は類似するが藤内式期後半から差が大きくなる。パネル文土器は藤内4段階ではほとんどみられなくなり、シャンプーハットパネル文土器は井戸尻1段階に中部地方を中心に多くみられるもので、区別すべきものと考えている。

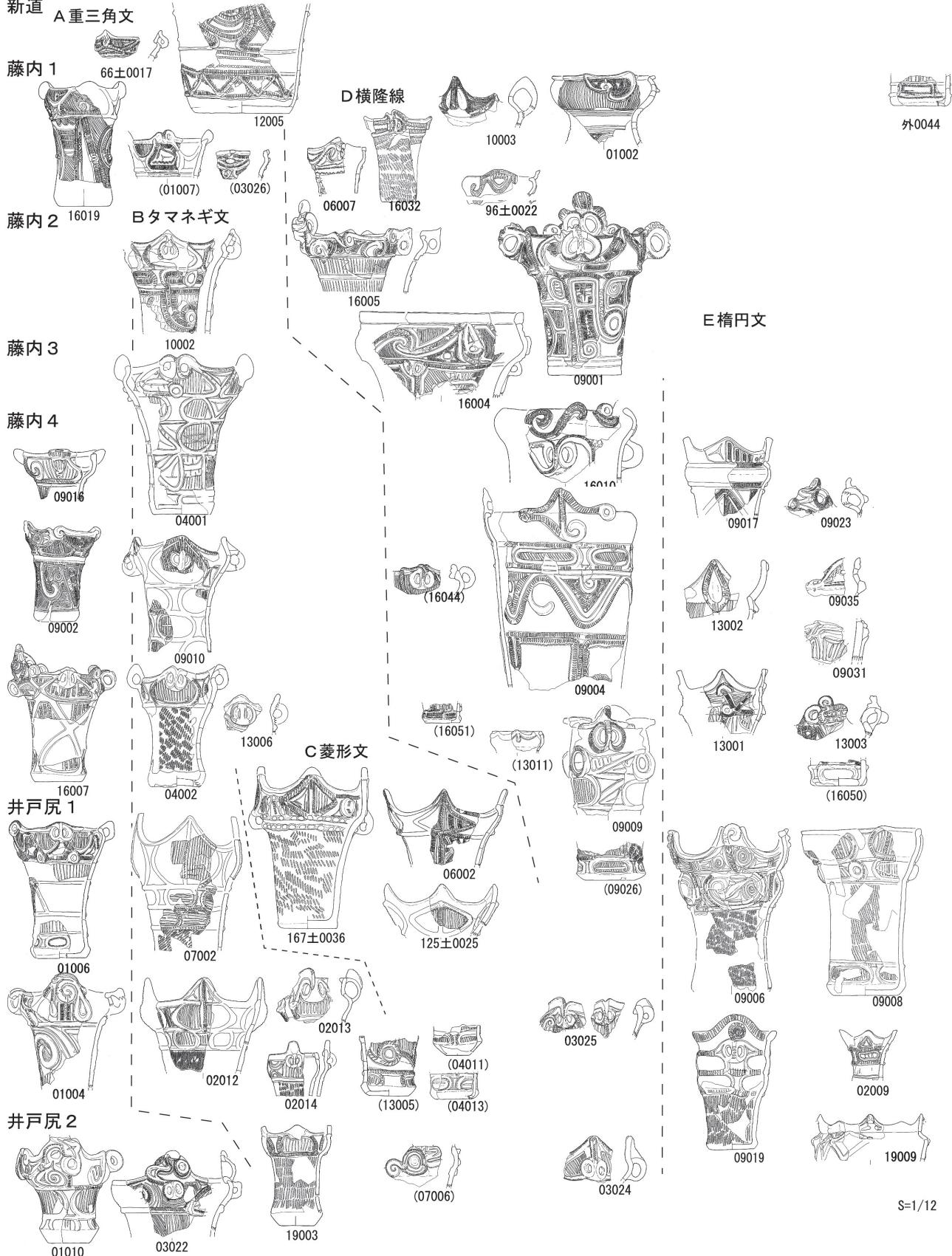
パネル文土器は、口縁部を無文として頸部に隆帶がめぐり、ここから胴部は垂下する隆線で縦に区画される文様構成となる。胴部の隆線間はパネル文で埋められるが、パネルがないものもある。従来型式を区別して考えるが、パネル文の省略の有無による違いであり他に文様構成は大差なく同じ型式のバリエーションとした。口縁部を無文とする胴部パネル文（F）、口縁部文様帶を無文とせずにパネル文で充填した有文の胴部パネル文（G）、口縁部を無文とするが胴部にパネル文を持たずに隆線にそって連続爪形文とジグザグの波状沈線で縁取るパネル文無し（H）、パネル文土器であるが口縁部文様帶がなく胴部文様帶からはじまる（I）の細型式に分類した。一般的にはパネル文の主文様となる胴部隆線がIJ字形から多段化、加飾化していく過程での変化がみられるものであるが、こうした変形に乏しく、細型式での系統性があまり明確でない。

パネル文土器は藤内1段階に口縁部有文（G）が先行して出現するが、藤内2段階までみられなくなる。口縁部無文（F）はやや遅れて藤内2段階から出現し、藤内4段階までみられるものの、数量的には少なく、大きな展開はない。パネル文無し（H）は、やはりGと同じく藤内1段階にみられ2段階までである。垂下する胴部隆線が途切れて草鞋虫状文となるものや懸垂隆線に円文がつくもの、口縁部文様帶に縄文がつくものなどいくつかのバリエーションがみられるが、継続性がない。パネル文土器はほとんど藤内1段階から2段階にかけて多く、以後勢力は衰えてわずかなものとなっていく。

出土した住居跡单位でみていく（第6図上表）と、藤内1段階には8号住居跡ではパネル文の全細型式GHIが共存し、3号住居跡で単独のG、16号住居跡で単独でHがならぶ。藤内2段階には8号住居跡と同じ組合せで2号住居跡にGH、16号住居跡にGHIがみられそれぞれにFが新規に組み合わさっていく。このほか単独でGが5号住居跡と8号住居跡にみられ、1段階の単独Gの3号住居跡からの分岐と思われる。このほか、1号住居跡にIが単独でみられ、前段階でIをもつ8号住居跡からの分岐となる。藤内3段階ではFのみが15号住居跡に集約され、

重三角区画文土器

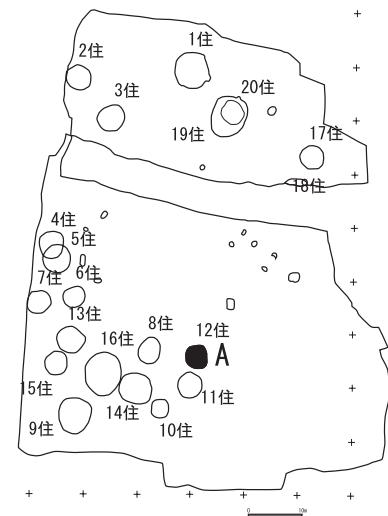
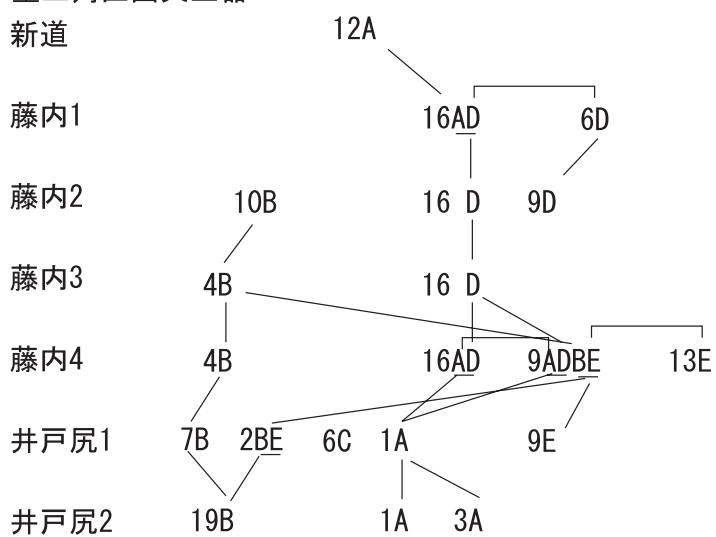
新道



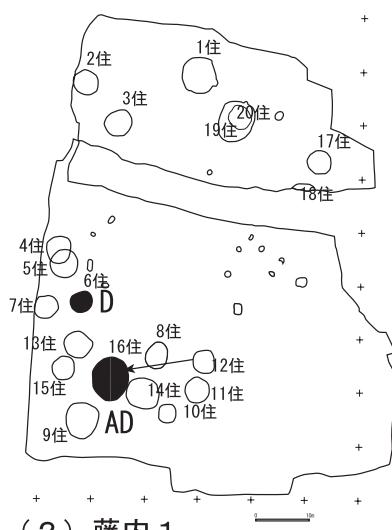
第3図 重三角区画文土器編年

重三角区画文土器

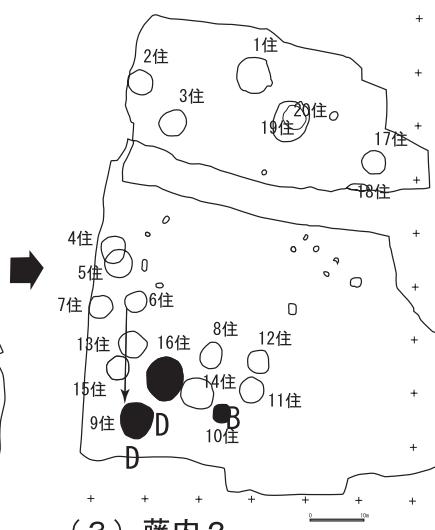
新道



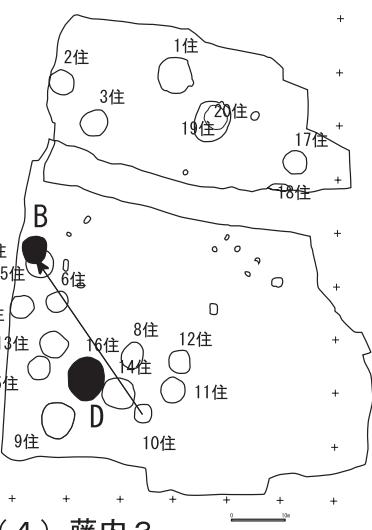
(1) 新道



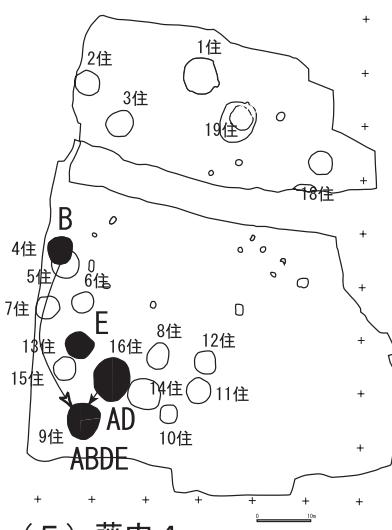
(2) 藤内 1



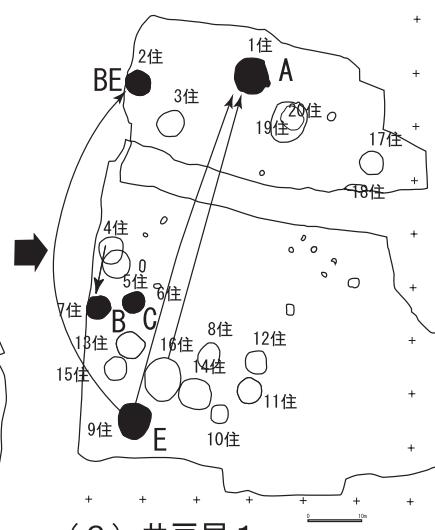
(3) 藤内 2



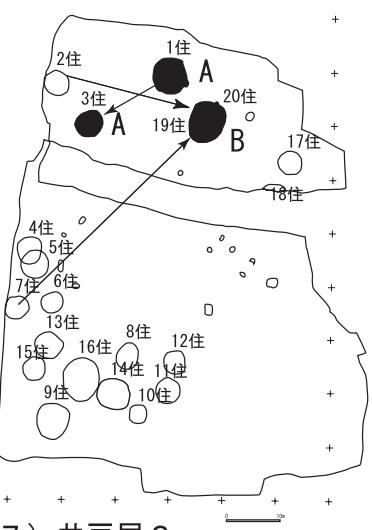
(4) 藤内 3



(5) 藤内 4

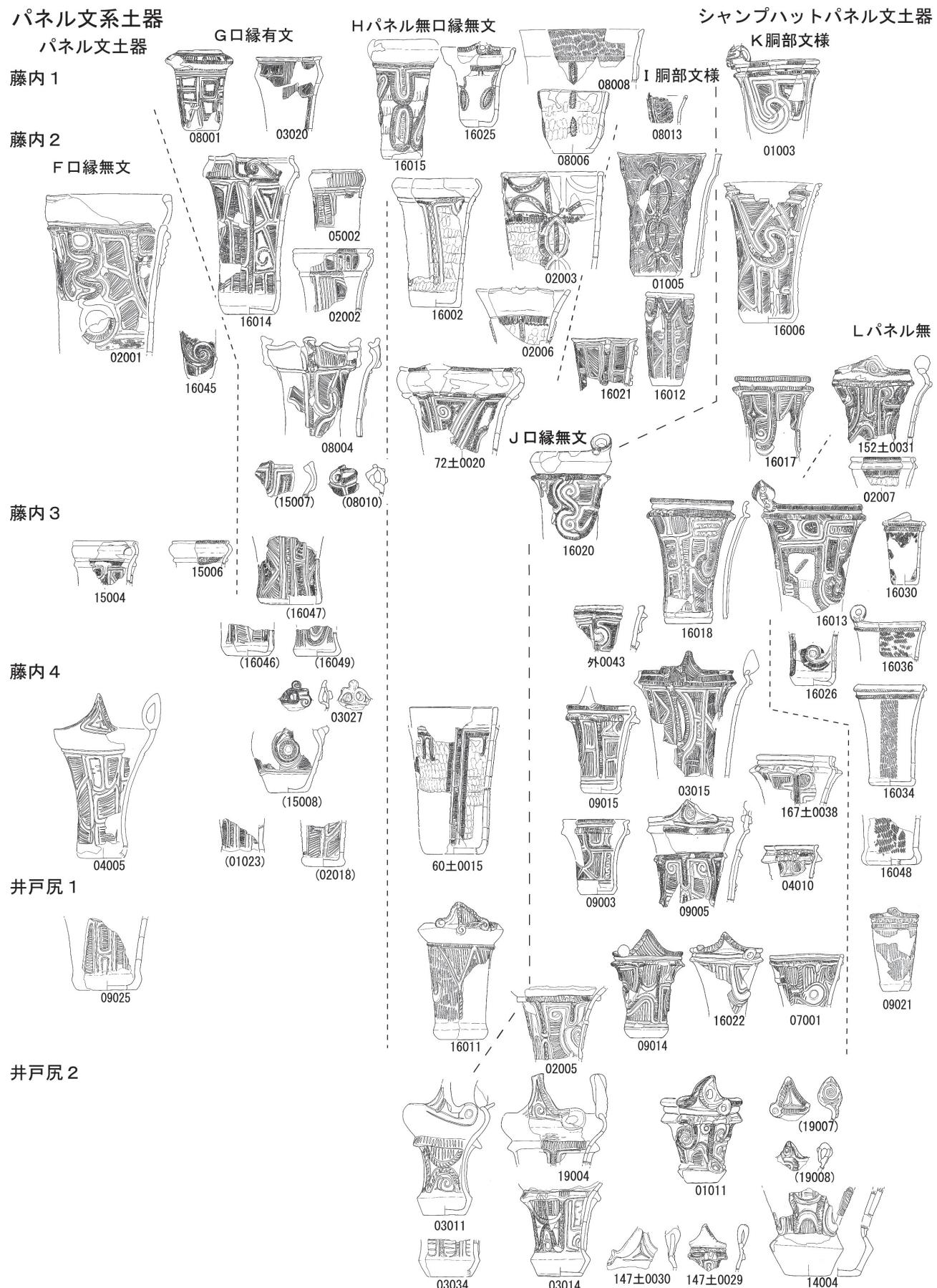


(6) 井戸尻 1



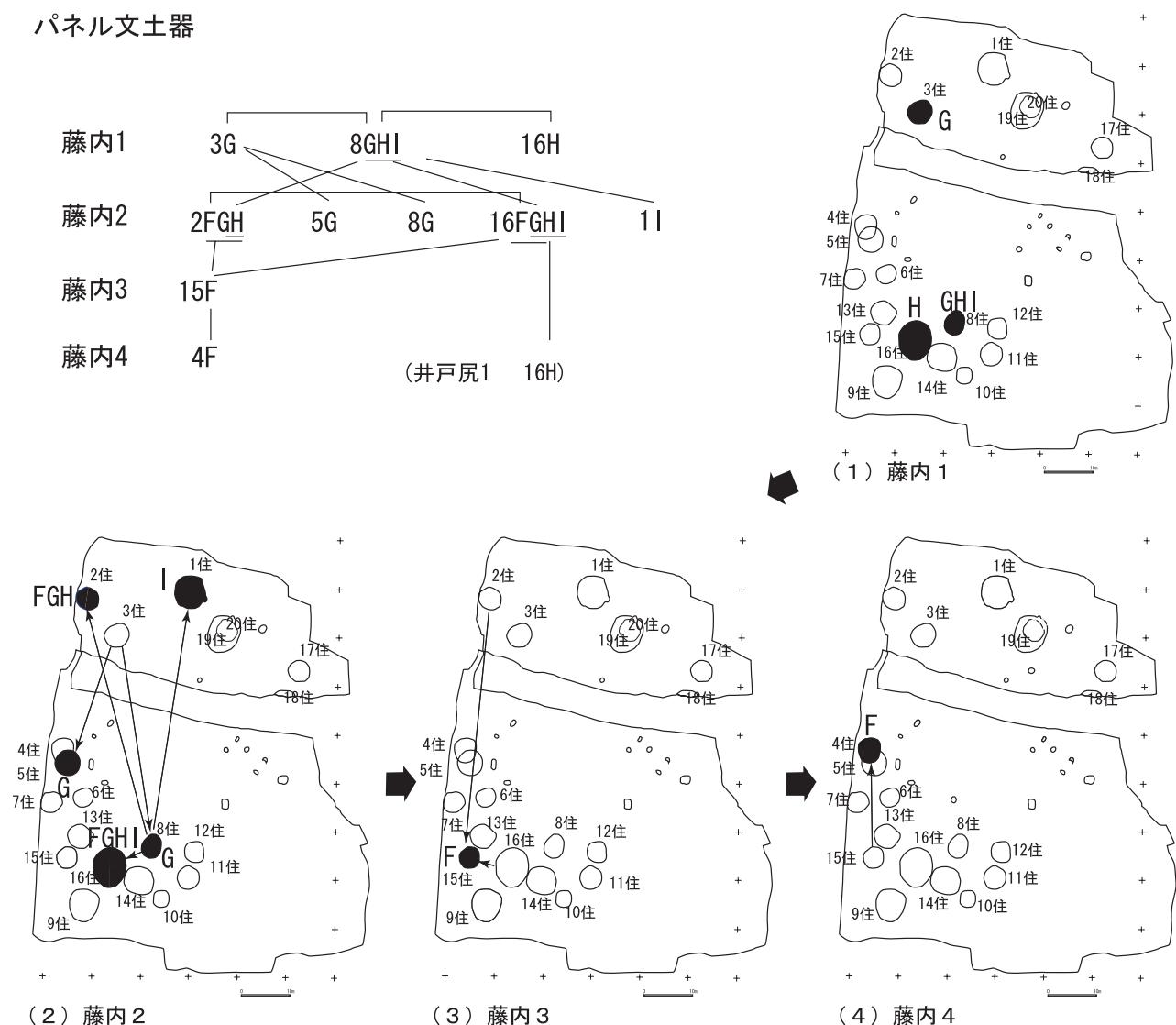
(7) 井戸尻 2

第4図 重三角区画文土器の系統と出土場所変遷



第5図 パネル文系土器編年

パネル文土器



第6図 パネル文土器の系統と出土場所変遷

4段階の4号住居跡まで継続していく。はなれて井戸尻1段階にHが16号住居跡にみられるが、胴部は縄文地文であり、別な細型式であるのかもしれない。

住居跡配置でみると（第6図変遷図）と藤内1段階には北側の1軒と南側2軒に分布する。南の8号住居跡がGHIとの組合せを持ち、中心的な位置にある。藤内2段階ではこの8号住居跡から北の2号住居跡と隣接する南の16号住居跡へ分岐させ、さらに北の1号住居跡へ単独Iが移る。藤内1段階に北にあった3号住居跡は南の5号住居跡と同じく8号住居跡へと北から南へ移ってしまう。藤内3段階では南の15号住居跡に集約され、藤内4段階でも南の4号住居跡へ移っている。パネル文土器の動きでは当初の藤内1段階では南に拠点を置きながらも南北にそれぞれ広がっているが、藤内2段階で見かけは同じだが南から北へ、北は南へと南北の住居跡が逆転する。以後は南へ移りわずかに継続し続けている。環状配置から南側のみと展開する。

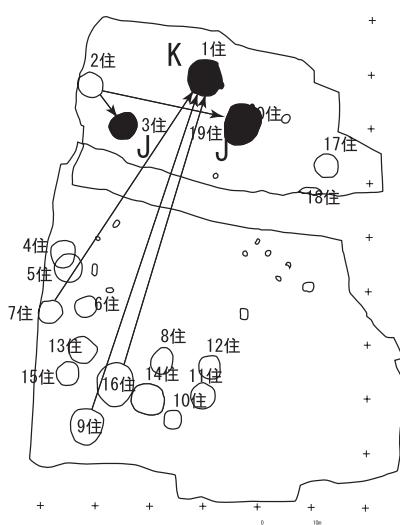
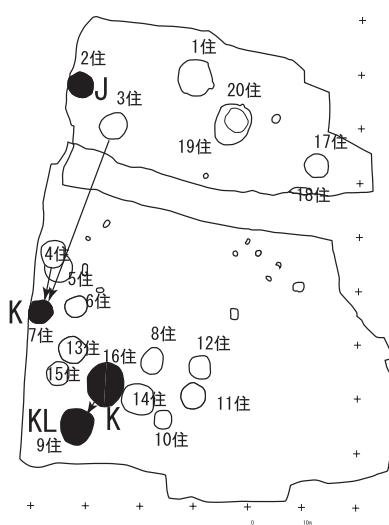
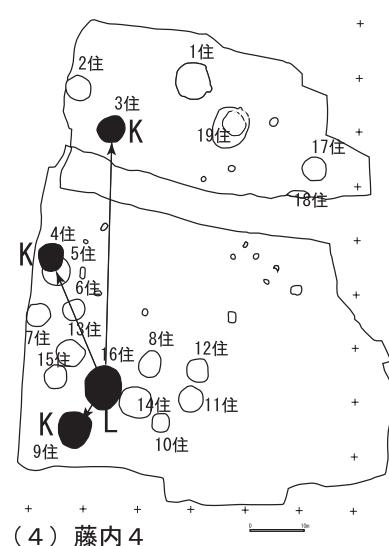
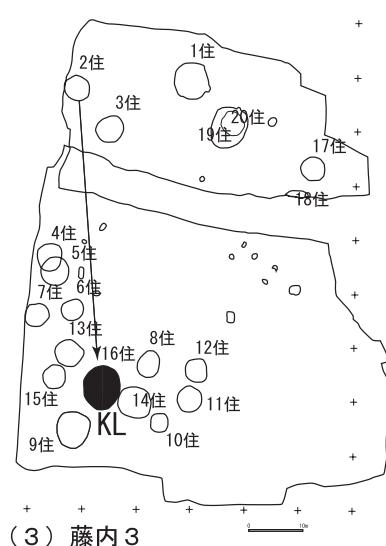
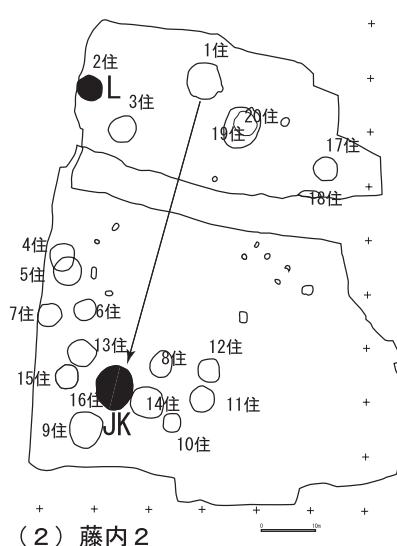
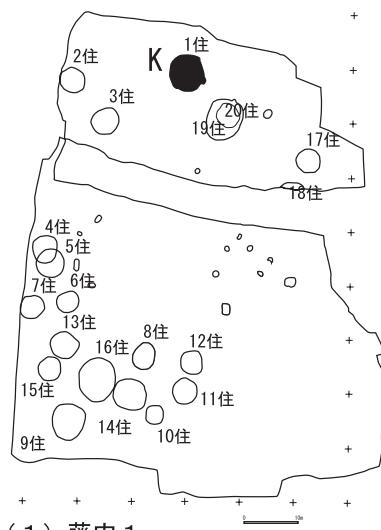
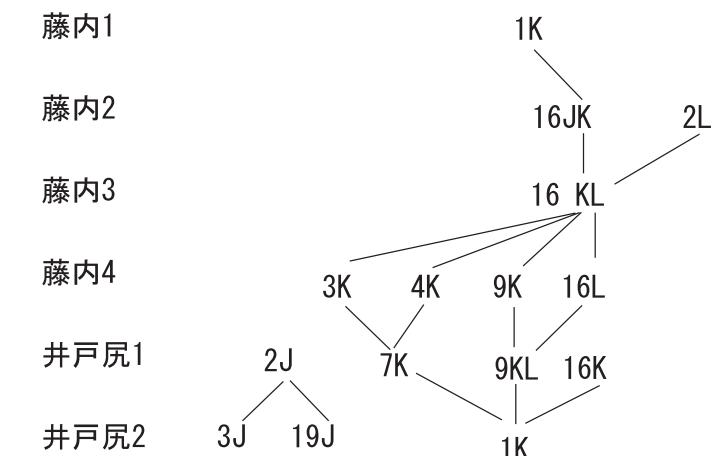
シャンプーハットパネル文土器は、口縁部に内反する

無文帯をもち胴部との境にシャンプーハット状隆帯をもつもの（J）と、口縁部がなく口唇部直下の隆帯から胴部文様となるもの（K）がある。またKのうちパネル文がなく、垂下する隆線にそって連続爪形文と波状沈線からなるパネル文無し（L）がある。

藤内1段階で胴部文様からなるKが出現し、この細型式はそのまま井戸尻2段階まで継続し、主流となっている。藤内2段階でJ口縁部無文とLパネル文無しが加わるが、Jは一時的であり井戸尻段階までみられない。Lパネル文無しは藤内3段階、4段階、井戸尻1段階まで続くが、次第に文様が縄文地文へと変わっていく。井戸尻1段階にはJが再び新たにみられるようになり、井戸尻2段階には量的にも安定してくる。

出土した住居跡単位でみてみると（第7図上表）と、胴部文様からなるKが主流となり、16号住居跡から長期にわたって出土している。藤内2段階では16号住居跡とは別に2号住居跡にLがみられるが、藤内3段階では16号住居跡に統合される。藤内4段階ではKが16号住居跡の

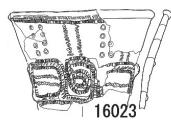
シャンプーハットパネル文土器



第7図 シャンプーハットパネル文土器の系統と出土場所変遷

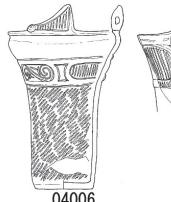
楕円区画文土器

藤内3 M頸部楕円文



16023

藤内4



04003

04006

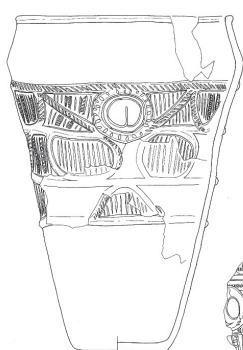
井戸尻1



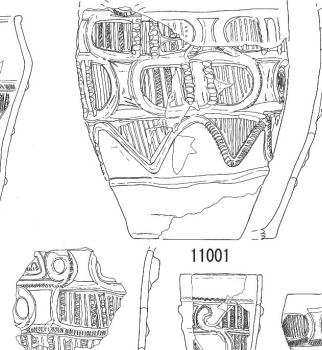
02004

04006

N胴部楕円文



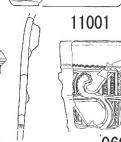
01001



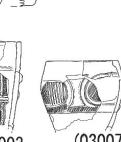
11001



06004



06003



(03007)

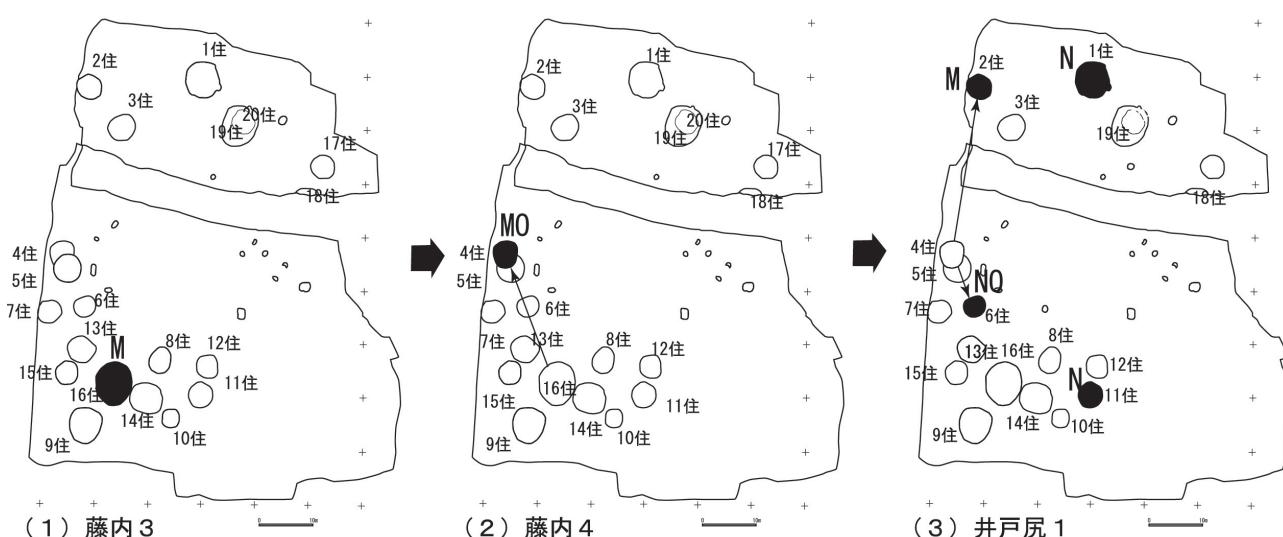
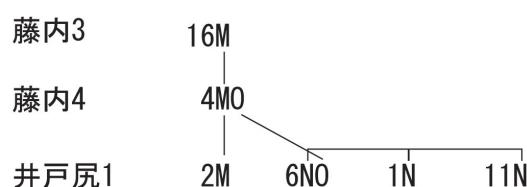
○横帯文



04008



06001



第8図 楕円区画文土器の編年と系統変遷

抽象文土器

猪沢 P渦巻文



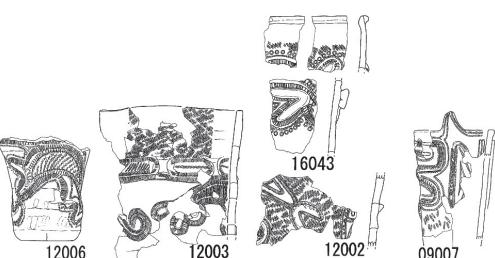
新道

05001

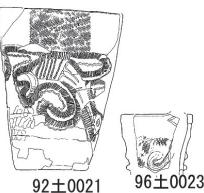


08007

Qサンショウウオ状文



藤内 1



猪沢

5P

新道

8P

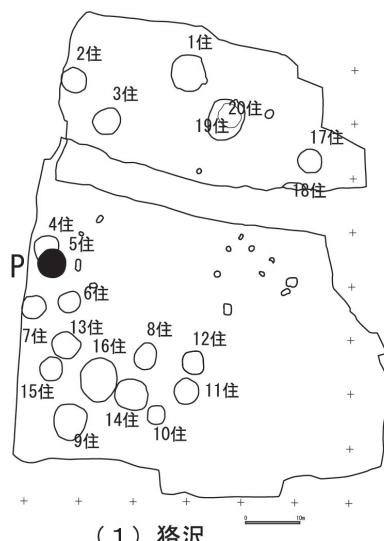
9Q

12Q

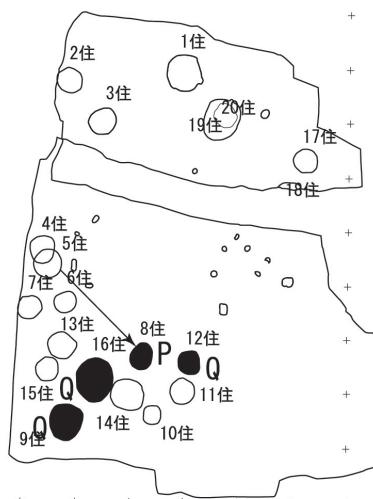
16Q

藤内1

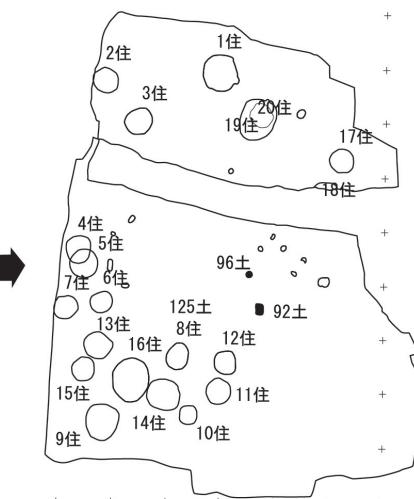
92土Q 96土Q



(1) 猪沢



(2) 新道



(3) 藤内 1

第9図 抽象文土器の編年と系統変遷

単独から3号住居跡、4号住居跡、9号住居跡と大きく分岐していき、16号住居跡にはLのみが残る。井戸尻1段階に16号住居跡のLはみられず別にKが入ってくる。Lは9号住居跡のみにみられ16号住居跡を統合している。またKが7号住居跡に単独でみられ、藤内4段階の3、4号住居跡Kを統合していると思われる。Kは当初の単独での存在から藤内4段階に大きく拡散分岐し、また次第に統合されていくあり方となっている。こうした動きとは別に井戸尻1段階では新たにJが2号住居跡に

みられ、井戸尻2段階になると3号住居跡と19号住居跡へ分岐していき、Kの流れとは異なった独立した出現のあり方を示している。

住居配置でみると(第7図変遷図)と藤内1段階は北側の1号住居跡にあり、藤内2段階で出現するLも北側の2号住居跡に位置する。藤内2段階から3段階にかけては北から南側の16号住居跡へ順次移ってくる。藤内4段階ではそこから北の3号住居跡、南の4、9号住居跡へと拡散する。井戸尻1段階には北の3号住居跡も4号住

居とともに南側の7号住居跡へと移っていく。井戸尻2段階には南側にあった3軒はすべて北の1号住居跡へ移動し統合される。Kは北から南へ、そして南北へ拡散したら南へ、北へと場所を何度も大きく移していることがわかる。この一方で井戸尻1段階に成立するJは北の2号住居跡に始まり、井戸尻2段階にも北の3号住居跡、19号住居跡へ分岐するが、北側のみでの移動と限定的である。

楕円区画文土器（第8図）

胴部に楕円形区画文がめぐる一群で、口縁部を無文として頸部に1段楕円区画文がめぐる（M）、胴部に複数段の楕円区画文がならぶ（N）、頸部楕円区画文に似るが楕円区画文に類する文様が幅広く胴部に展開する横帶文（O）に細型式を分類した。O横帶文土器は関東に多くみられる型式であるがここでは小型品がわずかに存在するのみである。もともと楕円区画文土器とは異なる型式である。いずれも吉林第4遺跡では量が少なく主流とはなりえていない。

藤内3段階でM頸部楕円区画文土器が出現し、井戸尻1段階までみられる。Nの胴部楕円区画文土器は井戸尻1段階のみ。Oの横帶文土器は藤内4段階から井戸尻1段階まで。住居単位でもMは単独で各段階に引き継がれている。Oは藤内4段階に4号住居跡でMといっしょとなるが、井戸尻1段階では分岐する。井戸尻1段階でNが3軒出現するがそれぞれ分かれている。住居配置でみるとMは藤内3段階から井戸尻1段階にかけて徐々に北側へ移動していく。Oはほぼ中央付近にとどまる。井戸尻1段階に出現するNは南、中央部、北と3軒とも広く分散している。それぞれの細型式毎に展開が異なったあり方を示している。

抽象文土器（第9図）

胴部にサンショウウオ状の抽象的な動物文様が配されるもので、一般的には新道式期から藤内式期前半に多くみられるものである。吉林第4遺跡では猪沢式期に渦巻文を基調にしたもの（P）とサンショウウオ状となるもの（Q）の細型式とした。勝坂式土器初期の猪沢式期に始まり新道式期に比較的多くみられ藤内1段階までみられる。Pは初期には単独で5号住居跡にみられ、新道式期では8号住居跡へ継続していく。また新道式期でQが3軒に単独で存在する。藤内1段階になると住居跡ではなく、土坑に埋設された後みられなくなる。最終的には墓地に埋葬されて終焉となっている。住居配置でみると猪沢式期に南側ではあるが全体中央西よりからはじまり、次期にはそこより南東側にひろく分散するように展開している。藤内1段階には住居跡ではなく土坑に埋設されている。集落が展開し始める藤内1段階までにはなくなってしまう黎明期の型式である。

人体文土器（第10図）

特に細分類しなかったが全体で5個体のみである。胴部には対抗するU字モチーフが展開するもの（R）で主に井戸尻式期にみられる型式である。藤内4段階に16号住居跡にみられ、井戸尻1段階で北側の2号住居跡、19号住居跡へ分岐しながら移動する。井戸尻2段階で北側で中間に位置する3号住居跡へ集約し、井戸尻3段階で同じく北側の東端にある17号住居跡に移る。南側から始まるが、井戸尻式期には北側でのみ移動する。

W字文土器（第11図）

口唇部直下に波状隆線、W字状隆線がめぐるもの（S）。これまでみた重三角区画文土器やパネル文土器とは系統が異なるものでかつてB群としてくくったものである（今福2011）。中部地方に多くみられるが本遺跡では少ない。口縁部形状からいくつか細分類が可能であるが、個体数のわりに細かくなりすぎるのでしなかった。藤内2段階に単独で8号住居跡のみにみられ、藤内3段階で15、16号住居跡に分岐する。この動きは縄文系土器と同じである。藤内4段階で16号住居と土坑3基、井戸尻1段階で7号住居跡にあるのみである。住居分布をみても南側での中央部に始まりそこから南西方向へ移動していく。藤内4段階となるこの型式末期には抽象文土器と同じく土坑への埋設がみられる。

櫛形文土器（第12図）

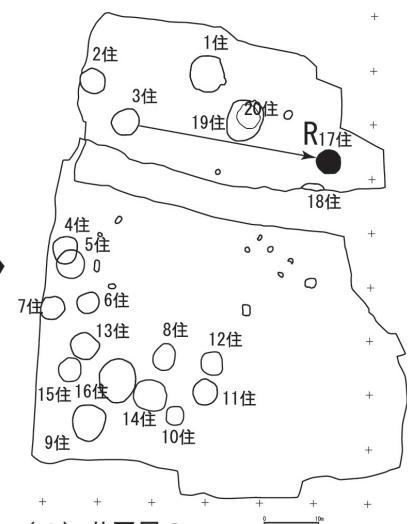
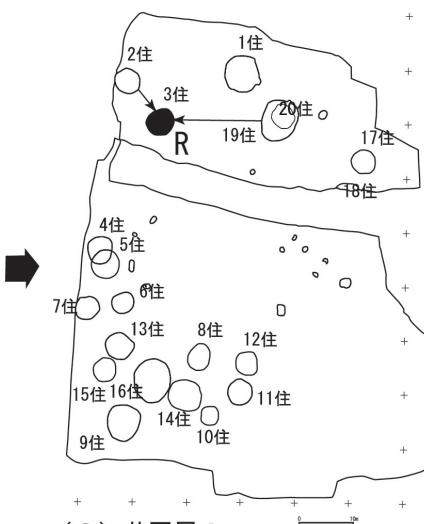
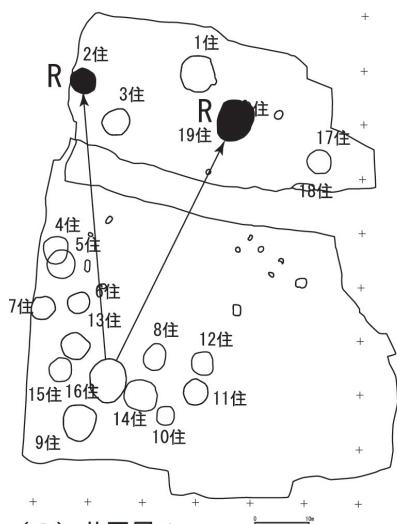
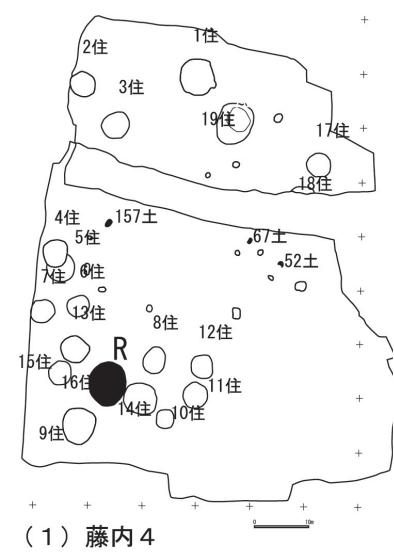
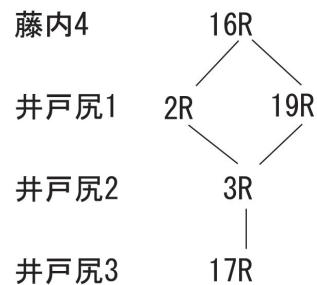
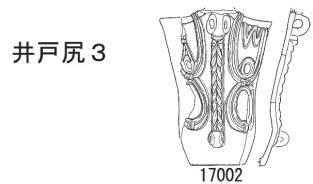
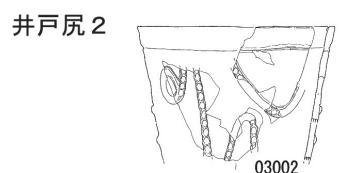
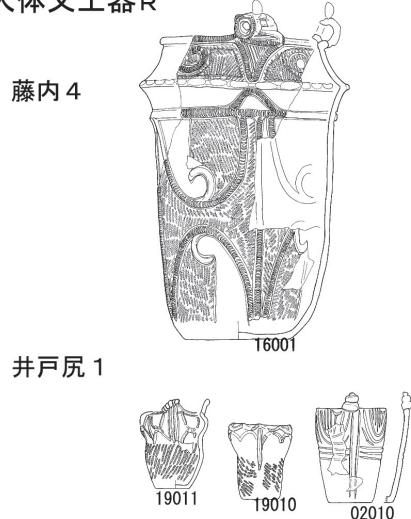
土器の底部がふくらみ櫛状の文様がつくもので、長野方面に多くみられる平出Ⅲ類A土器から発展する一群であり、かつてC群としたくくったものである（今福2011）。井戸尻2段階に2軒の住居跡でみられ井戸尻3段階には3軒へと分岐し、また土坑埋設もみられる。住居配置でみると中央西よりの4号住居跡と北側の19号住居跡にはじまり、井戸尻3段階で北側の3号住居跡と18号住居跡へ分岐する。全体では北半部で展開している。

縄文系土器（第13図）

主となる文様が縄文となる一群で、器形や口縁部文様帶の有無により細分類した。口縁部に無文帶をもつもの（U）、口唇部にわずかな無文帶があるがふくらんだ口縁部をもって全面縄文施文されるもの（V）、同じく口縁部がそるもの（W）、口縁部が直立するもの（X）の4細分類とした。各時期にわたってみられ、主流型式となっている。もともとが重三角区画文土器などの文様を省略したかたちで成立しているものととらえることができ異なる型式をいっしょにしてしまっている可能性もある。

藤内1段階から口縁部がふくらむもの（V）と直立するもの（X）がみられ、長く継続していく。口縁部無文となる（U）は藤内2段階にみられるが、普遍的となるのは藤内4段階からで、井戸尻3段階までつづく。口縁部が反るもの（W）は藤内3段階から安定的にみられる

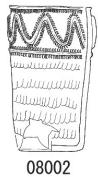
人体文土器R



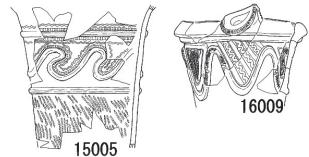
第10図 人体文土器の編年と系統変遷

W字文土器S

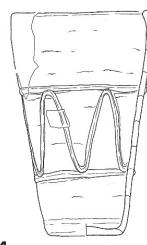
藤内 2



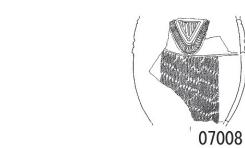
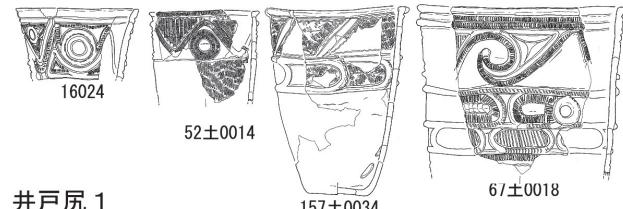
藤内 3



藤内 4



井戸尻 1

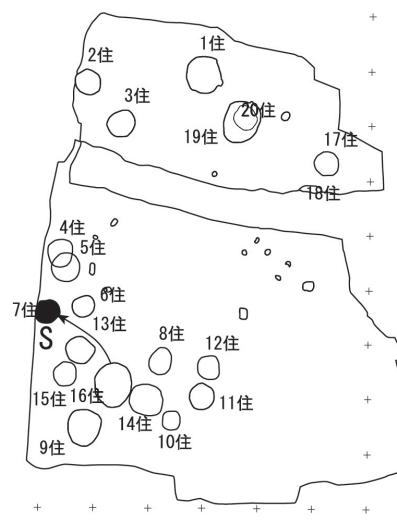
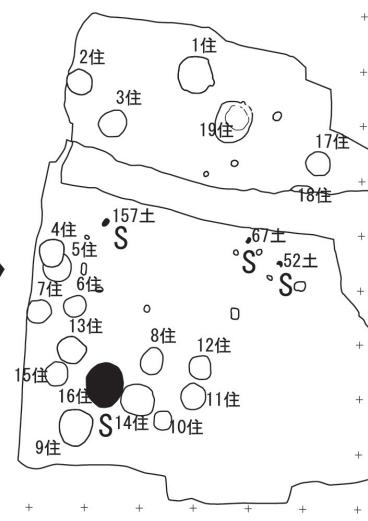
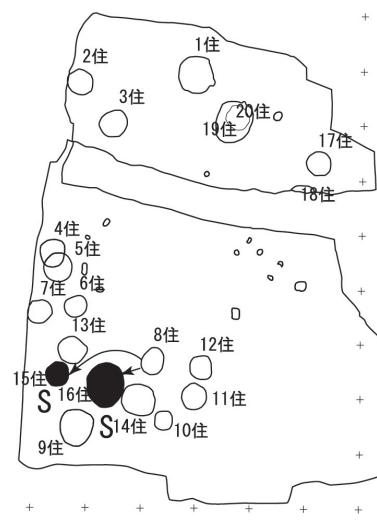
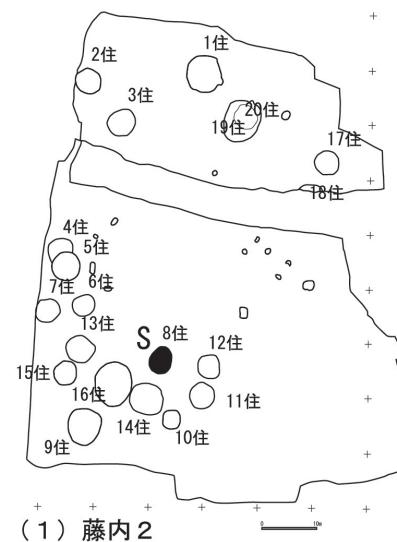
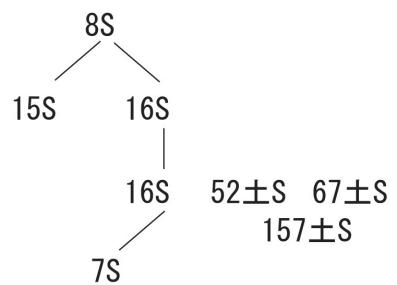


藤内2

藤内3

藤内4

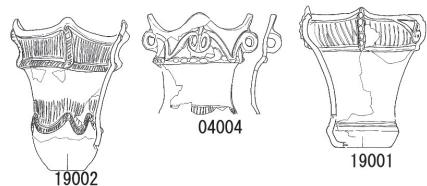
井戸尻1



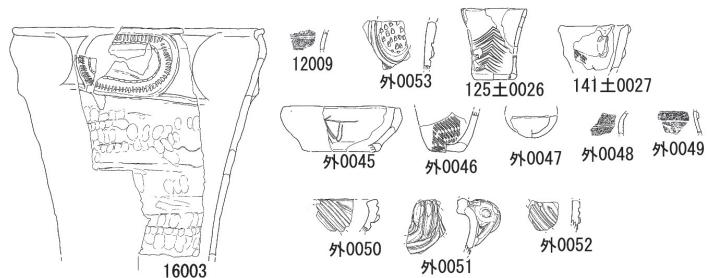
第11図 W字文土器の編年と系統変遷

櫛形文土器 T

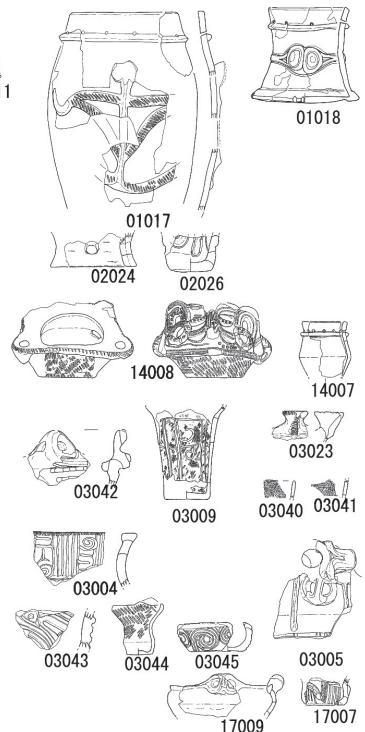
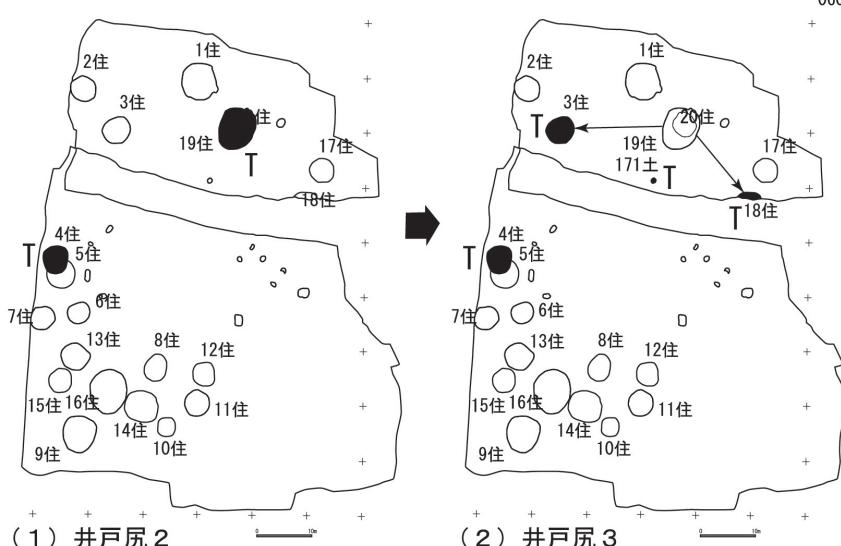
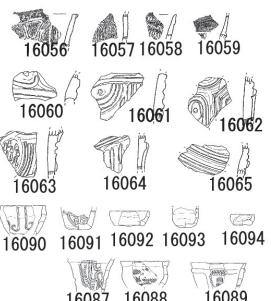
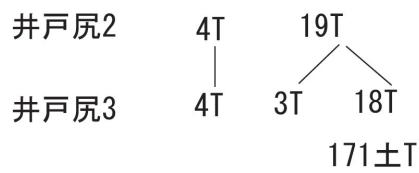
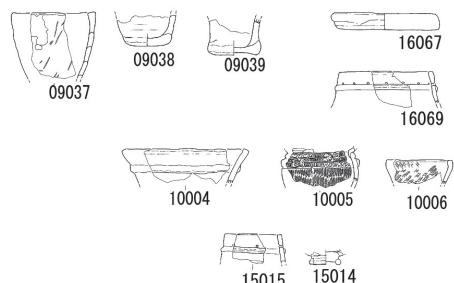
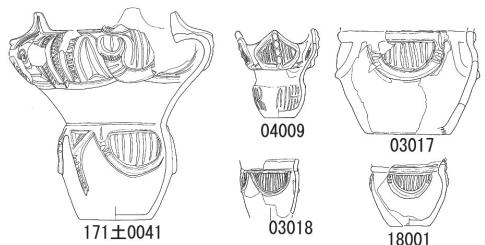
井戸尻 2



その他



井戸尻 3



第12図 櫛形文土器の編年と系統変遷・その他の土器

縄文系土器

新道



藤内 1



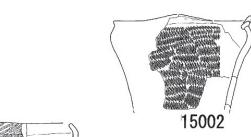
X 口縁直立



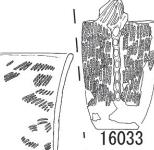
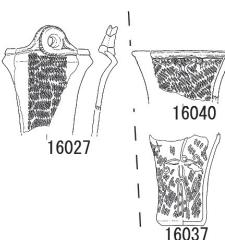
藤内 2 U 口縁無文



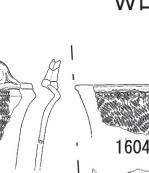
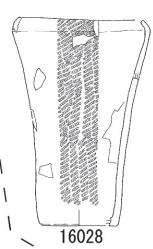
V 口縁膨らむ



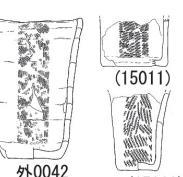
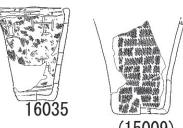
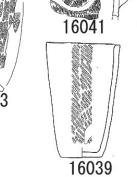
W 口縁反る



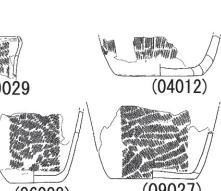
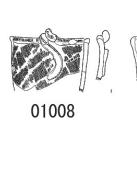
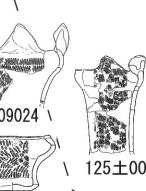
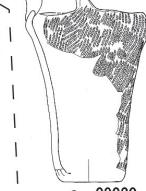
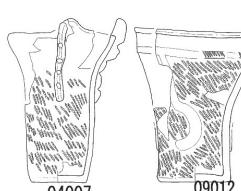
藤内 3



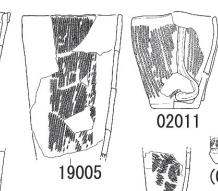
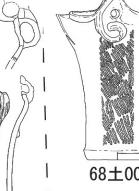
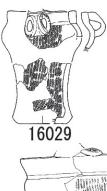
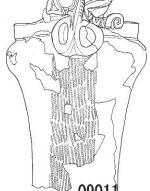
W 口縁反る



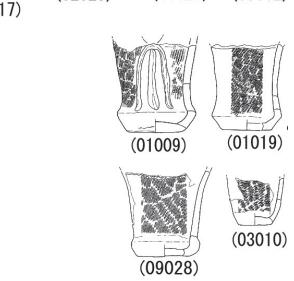
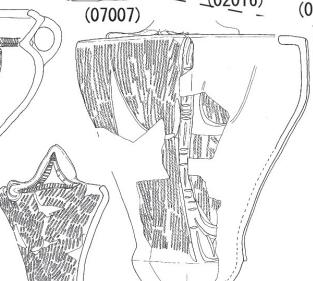
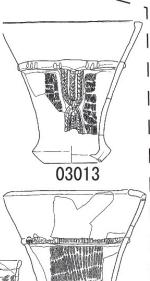
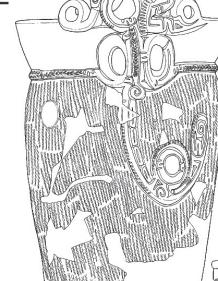
藤内 4



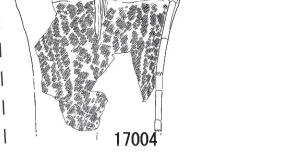
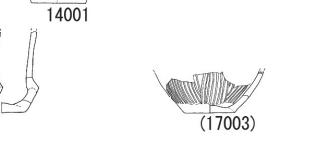
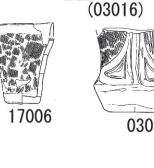
井戸尻 1



井戸尻 2



井戸尻 3



17001

17005

17006

03021

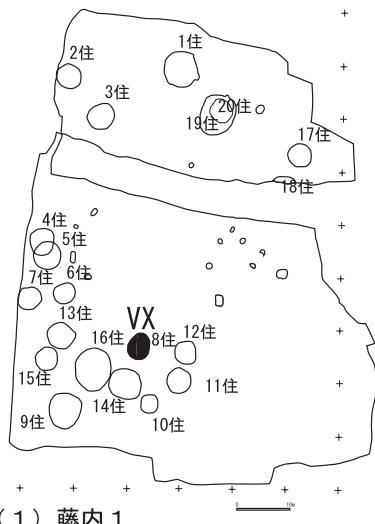
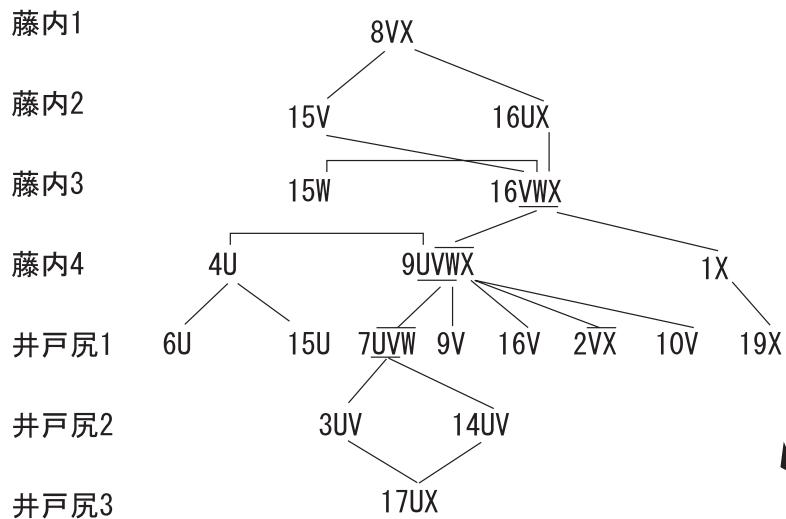
03003

(17003)

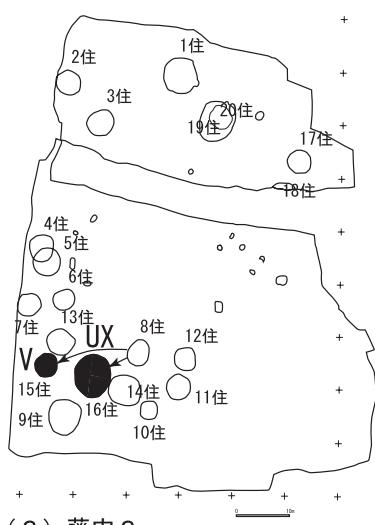
17004

第13図 縄文系土器の編年

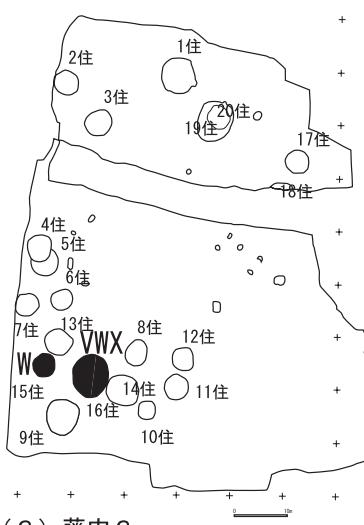
縄文系土器



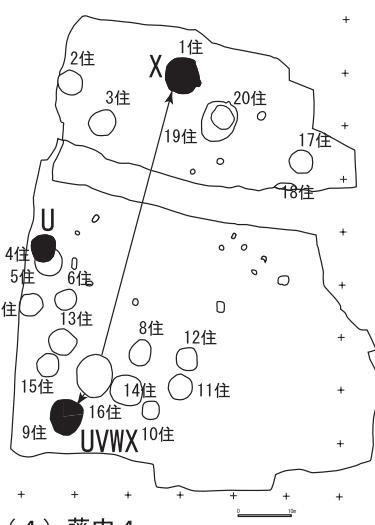
(1) 藤内1



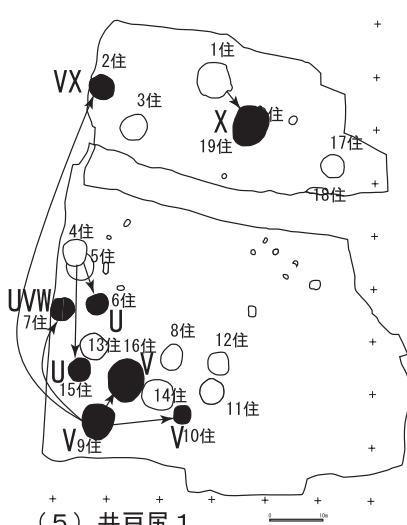
(2) 藤内2



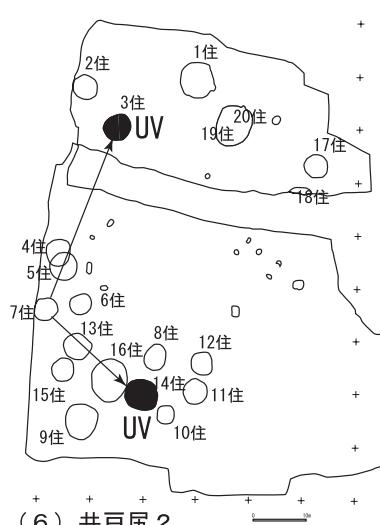
(3) 藤内3



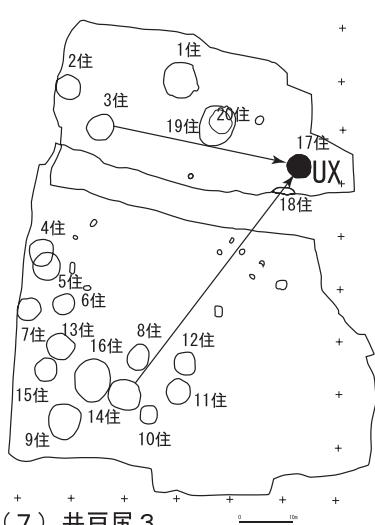
(4) 藤内4



(5) 井戸尻1



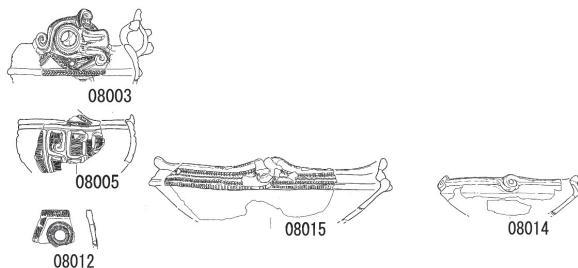
(6) 井戸尻2



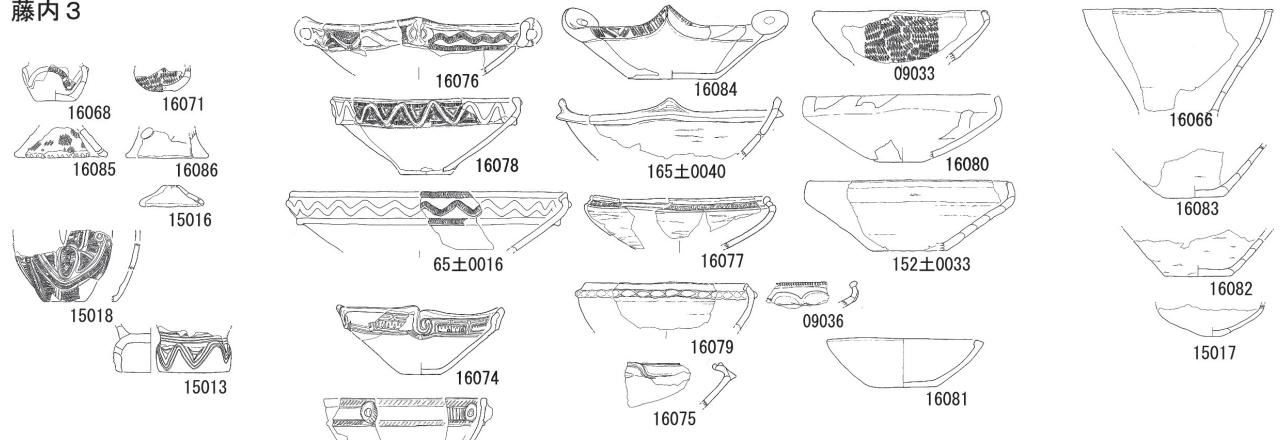
(7) 井戸尻3

第14図 縄文系土器の系統と出土場所変遷

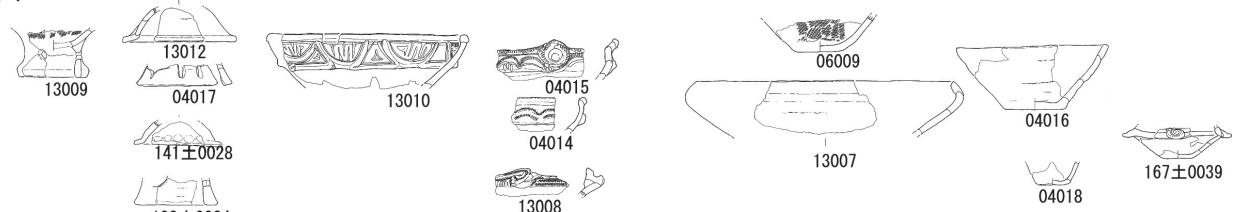
藤内 2



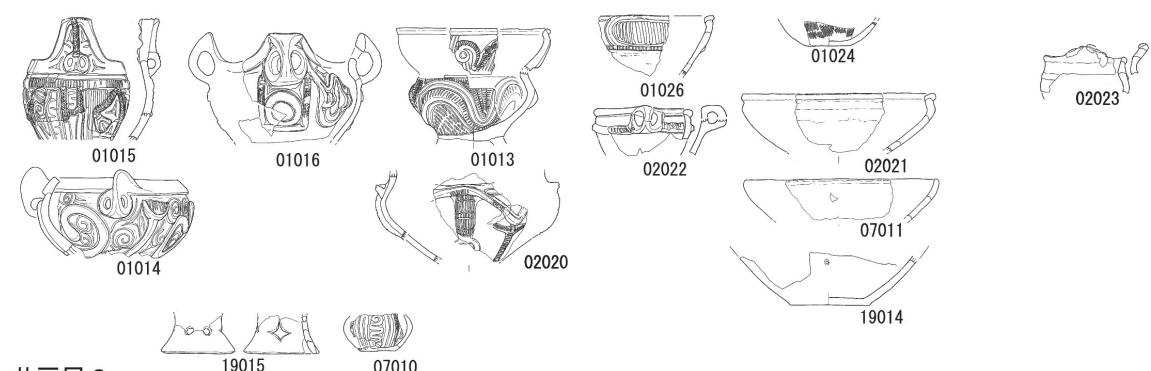
藤内 3



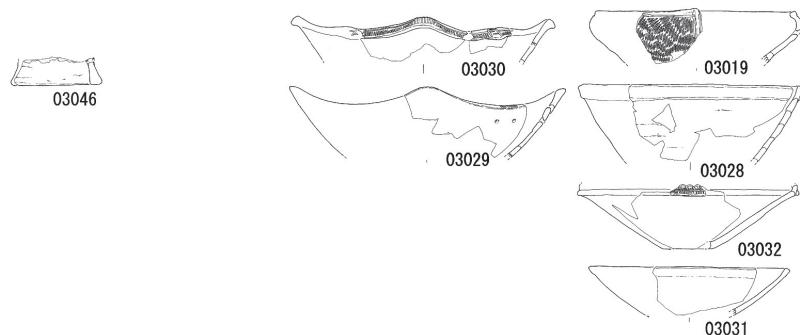
藤内 4



井戸尻 1



井戸尻 2



第15図 鉢形・浅鉢形土器

が井戸尻1段階までとなる。

住居単位でみると（第14図上表）と藤内1段階では8号住居跡のみにV Xが組合わさっているが藤内2段階ではVとXは15住居跡と16号住居跡へとそれぞれ分離する。W字文土器と同じ動きである。藤内3段階ではこのVとXが再び16号住居跡へ統合され新たにWを加えてVWXとなっている。ただ15号住居跡はWの単独となる。藤内4段階ではこのVWXが9号住居跡へ引き継がれ新たにUを加えてUVWXとなり、多くの細型式を併せ持つこととなる。新たなUは別途4号住居跡で、またXが1号住居跡にて単独にみられる。井戸尻1段階では統合された9号住居跡のUVWを7号住居跡が引き継ぎ、そのほかVの単独が9、10、16号住居跡にみられ、前時期にVをもつ住居跡は9号住居跡しかないのでここから分岐してきているものとした。あわせて2号住居跡のVXも9号住居跡からの分かれである。Uの単独が6、15号住居跡でみられ、4号住居跡から分岐してくる。19号住居跡のXは1号住居跡からの継続である。この時期多くの分岐がみられる。井戸尻2段階になると7号住居跡のUVが3号住居跡と14号住居跡の2軒のみに引き継がれ、井戸尻3段階には17号住居跡に統合されていく。16号住居跡から9号住居跡、7号住居跡へと多くの組合せを持って継続し、7号住居跡の井戸尻1段階で拡散するように広がるが、以後急速に縮小していくのがみてとれる。

住居配置でみると（第14図変遷図）と、南側の住居群を細かく変遷していくが、藤内4段階ではXが単独で北側の1号住居跡へ分岐していく。多くの組合せを持つ16号住居跡、9号住居跡、7号住居跡はいずれも南側で比較的近い位置での移動となるが、井戸尻1段階での拡散時には北側へも2号住居跡を分岐させている。藤内4段階での単独Uの4号住居跡は井戸尻1段階で近接する南側住居へ移動している。北側1号住居跡のXは井戸尻1段階でやはり南側で隣接する19号住居跡へ移動する。井戸尻2段階で主となっていた7号住居跡から北側の3号住居跡と南東の14号住居跡へ分岐し、井戸尻3段階では北側西よりの17号住居跡へ統合されていく。南側の住居跡を細かく移動しながら藤内4段階以降順次北側へも分布を広げていっている。

鉢形・浅鉢形土器・その他

器形が丸みを帯びた鉢形や台付き鉢、浅鉢形土器が相当量みられる（第15図）。これらの土器については明確な編年的な位置づけができなかったため今回の分析からは対象から外した。また有孔鍔付土器やミニチュア土器、吊手土器も系統性がおえず、さらに異系統の阿玉台式土器、焼町土器など単発的なもの（第12図）についても対象から外した。

5. 住居跡毎の各型式の出土状況

土器型式毎に集落内での出土位置を編年でみて

きたが、それぞれの土器型式の組合せを検討してみたい。これまでの各土器型式のあり方はそれぞれ独自に展開しておらず、住居跡でまとまって出土していて各土器型式間どうしでセット関係となっている。各住居毎の出土土器型式と編年的位置づけをまとめた（第2表）。一瞥すると長期にわたって節操なくいろいろな型式が出土している1号住居跡や3号住居跡といった事例や、断続した二時期にわたり廃棄されている2号住居跡と4号住居跡の事例、一時期のみの廃棄の6号住居跡、7号住居跡の事例、特定の型式に集中する9号住居跡の事例やさらに長期にわたっている16号住居跡の事例など多岐にわたる様相を示している。時間的な累積では、連続型、単期型、断続型廃棄にわかることができるが、その要因については別の視点が必要となる。ここでは土器型式の有意な組合せをみていく。

1号住居跡では藤内1段階から井戸尻2段階まで連続して各土器型式がみられる。組合せでは重三角区画文を軸にシャンプーハットパネル文や楕円区画文土器がセットとなっているのがわかるが断続的である。3号住居跡もほぼ同様で、井戸尻2段階に多くの組合せがある。

2号住居跡は藤内2段階と間をあけて井戸尻1・2段階の土器がみられる断続型廃棄となる。藤内2段階ではパネル文系土器に限定され、まとまりをもって廃棄されている。井戸尻式期では主要な重三角区画文土器とシャンプーハットパネル文土器、縄文系土器でまとまり、頸部楕円区画文土器と人体文土器の組合せとなる。4号住居跡は藤内4段階と井戸尻後半期の二期に分かれる断続型廃棄である。藤内4段階で重三角区画文土器、パネル文系土器、縄文系土器の主流型式に加えて楕円区画文土器がみられる。井戸尻式期には楕形文土器に限定される。5号住居跡でははやり断続しているが、有意な組合せとはなっていない。10号住居跡は断続的で特に有意性はみられない。11号・13号・14号・18号住居跡も単期で有意性はない。

12号住居跡は新道式期であり、吉林第4遺跡の初源期に位置づけられ、重三角区画文土器と抽象文土器の組合せとなる。17号住居跡は単期で井戸尻3段階に人体文と縄文系土器となる。

6号住居跡では藤内1段階にもみられるが、ほとんどが井戸尻1段階に集中しており、重三角区画文土器と縄文系土器に楕円区画文土器が組み合わさる。7号住居跡も井戸尻1段階の単期で同じく主流型式にW字文土器が加わる。8号住居跡は藤内1段階を中心に前後する時期の土器がみられる。新道期の抽象文土器と藤内2段階のW字文土器があるが、主となる藤内1段階ではパネル文土器と縄文系土器に限定される。9号住居跡は藤内2段階にもみられるが、藤内4段階から井戸尻1段階にかけて比較的出土量が多い。細型式を多く含むが重三角区画文土器とシャンプーハットパネル文土器、縄文系土器の三型式に限定される。15号住居跡は藤内3段階を中心

	猪沢	新道	藤内1	藤内2	藤内3	藤内4	井戸尻1	井戸尻2	井戸尻3
1住			A重三角 Kシャン◆ Iパネル			X縄文◆ N楕円◆	A重三角◆ Kシャン◆		
2住			Fパネル Gパネル Hパネル Lシャン			Jシャン B重三角 E重三角 M楕円 R人体	V縄文 X縄文		
3住			A重三角 Gパネル			Kシャン	(N楕円) A重三角	Jシャン R人体 U縄文 V縄文	T楕形
4住				B重三角	B重三角 Fパネル Kシャン M楕円 O楕円 U縄文			T楕形	T楕形
5住	P抽象			Gパネル					
6住			D重三角◆ Gパネル			C重三角 N楕円 O楕円 U縄文			
7住						B重三角 Kシャン SW字文 U縄文 V縄文 W縄文			
8住	P抽象		Gパネル Hパネル Iパネル V縄文 X縄文	Gパネル					
9住				D重三角	A重三角 B重三角 D重三角 E重三角◆ Kシャン U縄文 V縄文 W縄文 X縄文	E重三角 (Fパネル) Kシャン Lシャン V縄文			
10住				B重三角			V縄文		
11住							N楕円		
12住		A重三角 Q抽象							
13住					(D重三角) E重三角				
14住					▲			U縄文 V縄文	
15住			↑ Q抽象◆	V縄文 W縄文 Fパネル SW字文	W縄文 Fパネル SW字文	A重三角◆ D重三角◆ D重三角 D重三角	U縄文		
16住			A重三角 D重三角 Hパネル Kシャン Lシャン U縄文 X縄文 M楕円 SW字文	D重三角 Fパネル Gパネル Hパネル Iパネル Kシャン Lシャン V縄文 W縄文 X縄文 M楕円◆ SW字文 SW字文 R人体	A重三角 D重三角◆ Hパネル Kシャン Lシャン V縄文 R人体 X縄文	Hパネル Kシャン Lシャン V縄文			
17住								R人体 U縄文 X縄文	
18住								T楕形	
19住				▼			R人体 X縄文	B重三角 Jシャン◆ T楕形	
20住									
合計	1軒	3軒	5軒	8軒	3軒	6軒	10軒	6軒	3軒

◆接合関係(◆報告遺構--▲接合先)

第2表 住居別出土土器型式編年

に前後する時期の土器が混在する。縄文系土器を主にしてパネル文土器とW字文土器の組合せである。19号住居跡は井戸尻1段階、2段階にわたりそれぞれ組合せが異なっている。

16号住居跡は古林第4遺跡の中でも最も豊富な出土量を誇っていて新道式期から井戸尻1段階までの長期にわたっている。藤内1段階では重三角区画文土器とパネル文土器との組合せであり、これが藤内2段階でシャンプーハットパネル文土器と縄文系土器が加わる。藤内3段階ではパネル文土器がなくなり頸部楕円区画文土器とW字文土器が加わる。藤内4段階では縄文系土器と楕円区画文土器が欠落し人体文土器が新たに加わる。井戸尻1段階ではパネル文系土器と縄文系土器のみとなる。段階的に組み合わされる土器型式が交代していくようが見て取れる。住居跡毎にみていくと複数期間にまたがって断続的となったり様々である。

古林第4遺跡での遺物の遺構間接合は報告によると32例がある。これらについて報告されている出土遺構と接合先との接合関係をみると意図的な廃棄資料との積極的な接合は少なく、混入破片との接合が大半を占める。有意と認められるものは4例である。藤内1段階の6号住居跡出土土器06007はD重三角区画文土器であり、接合先の16号住居跡にもD重三角区画文土器が存在しており同じ細型式が認められる。また藤内4段階の9号住居跡出土の重三角区画文土器09009と09010もその接合先の16号住居跡に重三角区画文がある。井戸尻2段階では19号住居跡のシャンプーハットパネル文土器19004が接合先の1号住居跡にも認められる。この他のほとんどの接合関係は接合先に該当する土器型式が存在しておらず、また時期も異なることから二次的な遺物の分布による偶然とみなさざるを得ない。新道式期の16号住居跡出土抽象文土器16043は15号住居跡と接合しているが、この15号住居跡には該期の土器はみられない。1号住居跡の藤内1段階のシャンプーハットパネル文土器01003が接合した19号住居跡にも該期の土器はない。廃棄場所としての遺構間接合がほとんどみられないということは同じある集団が複数箇所に廃棄場所を定めておらず一ヵ所であることの蓋然性が高い。同時に二ヵ所へ廃棄していればその二ヵ所での接合関係が多くなることが予想されるがこうした例は希である。

6. 住居跡毎の各型式の組み合せ

住居跡出土の土器型式の組み合わせでみていくとあるまとまりが見て取れ(第16図)、土器型式を集団に置き換えれば集団間の集散となる。いっしょに居住している人たちが一ヵ所に廃棄していたのならばそれは型式の構成が居住者の属する集団の構成を意味する(第17図)。

猪沢期では抽象文土器のみであり、この型式集団がこの集落の最初の居住者となる。新道期になると重三角区画文土器があらたに出現し、これと抽象文土器がいっしょ

となる。二つの集団から構成されているものと見なせる。

藤内1段階では、抽象文土器の出土は土坑のみとなり、他の型式とセットにならずこの段階で終焉となる。重三角区画文土器は前から存在するが、新たにパネル文土器とシャンプーハットパネル文、縄文系土器が出現する。そして重三角区画文土器はこのパネル文系土器とかならず組み合せとなる。ただパネル文土器とシャンプーハットはセットにならない。パネル文土器でGHIの三細型式と縄文系土器だけというセットがあって、これは藤内2段階でのあり方に先行している。パネル文土器が多種の細型式でまとまっているのは、その中でさらに派閥が増え勢力を増してきていることを意味する。ここに新興の縄文系土器が結びつく。

藤内2段階での組合せは、パネル文系土器が主流となり、すべてに必ず含まれ、FGHIの四細型式などまとまと構成している。これに重三角区画文土器やシャンプーハットパネル文土器、縄文系土器が結びつく。W字文土器はここで新たに出現するが、単独でパネル文土器とセットとなり、他の型式とは距離をおいている。さらに重三角区画文土器とパネル文土器、縄文系土器が単独であり、セットをつくることもある。

藤内3段階ではVWXの多派閥となる縄文系土器にW字文土器の組合せが中心となっている。これに重三角区画文土器やパネル文系土器、楕円区画文土器がセットとなっており、これまでの重三角区画文土器やパネル文系土器などの勢力が弱まり、主従交代してきている。楕円区画文土器が新規に加わるが、主流の縄文系土器の仲間と結びついている。

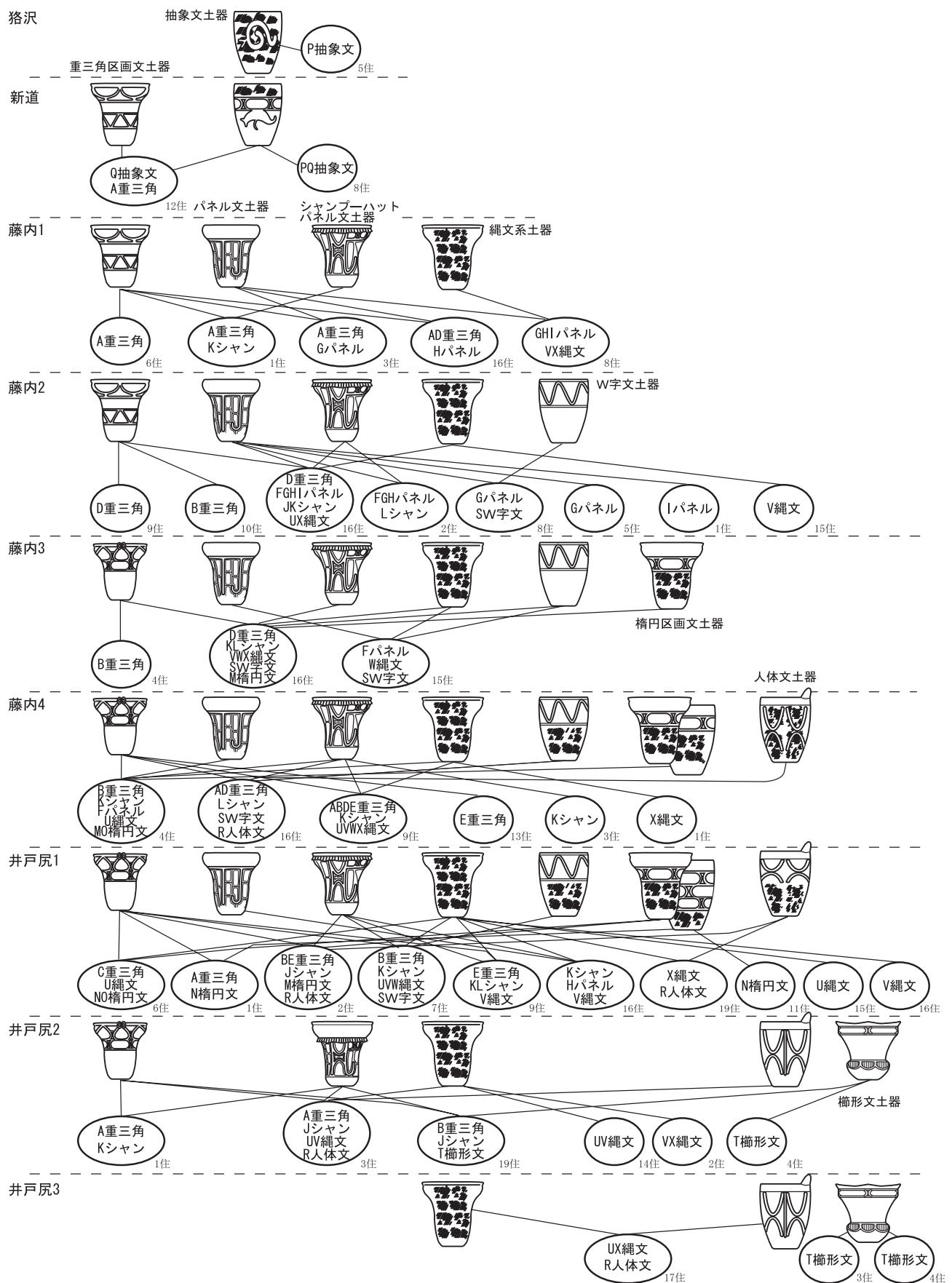
藤内4段階では再び重三角区画文土器とシャンプーハットパネル文土器の組合せが強固となりすべての組合せにてみられる。これに縄文系土器も結びついてくる。パネル文土器はわずかとなる。この段階には新たに人体文土器が加わるが、これはW字文土器と同じく縄文系土器とは結びつかない。

井戸尻1段階では重三角区画文土器と縄文系土器、シャンプーハットパネル文土器が組合せで重要な要素となっているがそれぞれわずかに組合せが異なってきているこの3型式が揃うのは2例しかない。楕円区画文土器が新規に加わるが、重三角区画文土器との結びつきが強い。シャンプーハットパネル文土器が組合せから抜けつつ代わりに楕円区画文土器がセットを構成してくる。楕円区画文土器と重三角区画文土器との組合せはシャンプーハットパネル文とともに藤内3段階からみられるもので継続的である。人体文土器は縄文系土器との二型式でセットとなるものがあるが、他の型式との組合せでは縄文系土器と相性がよくなさそうである。

井戸尻2段階では重三角区画文土器とシャンプーハットパネル文土器のセット関係が強く、これに縄文系土器、人体文土器、楕円区画文土器が連なってくる。人体文土器は多型式の中で縄文系土器ともセットを構成す



第16図 住居毎の土器型式組合せ



第17図 土器型式組合せ変遷

る。新規に櫛形文土器が登場するが、重三角区画文土器、シャンプーハットパネル文との組合せをとるが、人体文土器とは結ばない。

井戸尻3段階では多くの型式が消失し、もはや縄文系土器と人体文土器とのセットがみられるのみで、櫛形文土器は単独となっている。

型式のセット関係でみると集落のはじめには抽象文土器がいて、これに重三角区画文土器が新規に加わる。藤内1段階でパネル文系土器と縄文系土器が、藤内2段階でW字文系土器が、藤内3段階で楕円区画文土器がそれぞれ新規型式として加わり、これに伴って主となる土器型式が抽象文土器から重三角区画文土器、パネル文土器、縄文系土器とW字文土器というように変わっていく傾向にある。藤内4段階からは組合せが安定し、傾向が変わる。重三角区画文とシャンプーハットパネル文土器、縄文系土器の三型式の組合せが主流となり、この組合せの中に新興の楕円区画文土器、人体文土器、櫛形文土器が関係してきている。

まとめ

古林第4遺跡出土の土器を型式分類してそれぞれに時期細分を行った上で出土遺構でのまとまりに還元した。遺跡全体で土器型式の展開、型式の並行、また新型式の追加、消滅が起こり、こうした動態が住居跡という遺構にどのように分布して現れてきているのかは、この集落に居住した人々の動きであり、その累積結果である。住居単位でなく土器型式単位でその変遷をみるとそれぞれに異なった変遷をとっている。重三角区画文土器の南側から北側への移動とパネル文土器の南北での交代、縄文系土器の統合と拡散などそれぞれの異なった動態の累積結果が最終的に現れている。いまさらであるがこれらの動態は廃棄場所の選定であり居住地を現したものではない。集落内の住居変遷をみると、住居の出現時期における変遷は環状集落をあらかじめ呈しているように見え、住居単位での出土土器で住居の時期をきめた変遷では南側から北側に展開した変遷が読みとれる（伊藤2006）。土器型式個別での変遷をみると一致しない多様な動きがある。住居跡の配置について見かけ上で近接した住居跡をまとめて群単位としてとらえる向きもあるが土器型式での分析からは特に認められない。そもそもこれまでの縄文集落の分析の中でこれを分解して構成される基本的な単位を住居としてきたが、土器型式の研究成果をもって縄文集落の検討を模索していくことは、住居単位は分解されなければならずそこには複数の単位集団から構成されていることを知る。複数の単位集団とは複数の土器型式である。住居単位としている一括資料は複数の土器型式がまとまったものであり、型式の分類を集団の分類ととらえざるを得ないからである。そして住居単位でまとまる型式群は常に一定でなく追加、分裂、融合、消失を繰り返しているのである。集落内での検討で集団をと

らえていくのに土器型式を用いる以上土器型式による分類を採用し、これを単位とみなすのが当然となる。土器型式という考え方について、小林達雄は「型式」を集団に共有された土器設計図の元型となる範型に基づいて表現された形態として集団表象ととらえる。型式は「範型を保有する集団の広がりをあわらわす」のである（小林1977）。芹沢長介の型式という意味では「型式aはある限られた地域で、限られた時間内につくられた土器の組み合わせをいう。その型式aはそこで生まれ、土器を作り、用い、死んだところの人間の集団を意味する」こととなる（芹沢1958）。社会性に着目するときはこの型式から集団を探っていくことになるのである。住居跡は出土遺物の一括性からある時期の型式すなわち集団の組合せを一時的に示している容器物であってその中身は可変でたえず入れ替わるのである。土器型式による集落分析では住居は集団の単位とはなりえないものとなる。よって住居配置による集落内の大別小群という分節性については、土器型式からの視点では認められない。

古林第4遺跡には住居に土器を埋設するなどの施設がないことから土器型式の系統の在り方を居住場所へと転換できない。これまでみてきたのはある土器型式集団がのこした廃棄場所の動態である。廃棄場所の変遷と居住場所の変遷は一致しないが連動している可能性がある。住居には複数の土器型式が組み合わさり、時期的にも変動するが、この住居と結びつきの強い型式集団を想定することも可能である。土器を伴う施設をもつ住居跡があれば時期的な決定だけでなく帰属型式としてこれまでの住居形態研究との相互検証も可能となりうるものと思う。そして土器型式の変遷の中で土器文様の連続性と型式の中途出現あるいは消失という土器型式の消長が住居跡の消長とどのように連動するかなど着目しておきたいところである。

時間的な変化の中である土器型式が住居跡に廃棄されるが、次期には異なる場所へ廃棄される。いつ廃棄行為が始まりそして終わるのかその時機は何なのかという疑問が残る。先に居住者に対して廃棄場所は決まっているとう前提を示したが、住居跡によって廃棄物（出土遺物）量が極端に異なることもあり、複数の居住者による共同廃棄場が設定されていたとも推定できる。ある一カ所の居住者たちによる複数の廃棄場所は、遺跡での接合関係の少なさから考え難い。廃棄行為が終わるのは廃棄物が出なくなるからとするとそれは居住場所がなくなったとき居住しなくなったときとなる。すなわち住む場所を変えたときに廃棄場所も変えることとなる。ある土器型式がある時期に1軒の住居跡に廃棄していたが、次期には異なる2軒の住居跡に廃棄していたとすれば、その背後にはある土器型式を持つ居住者が次期には二つの居住地に分かれたということになる。ある土器型式の出土状況はそのまま集団の動態を反映している可能性がある。古林第4遺跡で検討してきた土器型式の消長はそのまま

集団の動態を反映していると考えてもらって差し支えないものと思っている。

土器型式毎の集落内での消長は廃棄場所の選択という観点からみてもそれぞれ異なっており、こうした累積によって最終的に環状集落を呈していると認識されうる。集落内における廃棄場所としての規制を前提にしているが、廃棄された複数型式のセット関係、廃棄期間、さらに住居施設における土器型式と廃棄場所としての土器型式への整合性はさらに類例を検討しながら追求していく必要がある。ただし廃棄場所の選択性や土器型式の系統観、編年の精度など主観的な部分や仮説を前提にすることも否めず、課題は多いことと認識している。土器型式による集落研究には当該時期の土器型式に対しての把握理解が最低限必要となってくるが、特徴的な新しいデータは必要なく、既存の報告書の内容にて出土遺構がわかる土器実測図があればじゅうぶんに検討可能である。さらに多くの事例を検討していきたいと考えている。多くのご批判ご指導をお願いしたいところである。

本稿は2012年11月24日帝京大学山梨文化財研究所にて山梨県考古学協会縄文部会で「北杜市古林第4遺跡の縄文土器」として発表したものを基本にしている。また修正再検討して2013年2月23日に東京都埋蔵文化財センターでおこなわれた研究集会『縄文研究の新地平2013～環状集落を見直す～』にて「甲信・関東の土器系統の分析」というタイトルで発表している。当日、東京都の遺跡の分析を主に発表し、時間の関係でこの古林第4遺跡については簡単に紹介したのみであった。この発表の後に安孫子昭二氏には多くの厳しい意見をいただき、また大いに啓発されたところもある。今回はもう一度考え方を整理した上でまた編年的な位置づけと土器型式分類を再検討して稿を起こした。よってかつての発表資料とは若干異なるところがある。他にも研究発表にあっては小野正文、小林謙一、黒尾和久、中山慎治、山本典幸、櫛原功一、伊藤公明、村松佳幸、北杜市教育委員会ら各氏各機関より様々なご意見ご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

注 図版スケールは土器1/20で統一してある。土器の番号は報告書と同じ。5桁の数字の上2桁は住居跡番号、下3桁が個別番号となっている。

参考文献

- 芹沢長介1958「縄文土器」『世界陶磁全集1』河出書房
小林達雄1977「型式、様式、形式」『縄文土器 日本原 始美術大系1』講談社
大泉村教育委員会1999『古林第4遺跡I (石器編)』
大泉村教育委員会2002『古林第4遺跡II』
今福利恵・閨間俊明2004「山梨県における縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文集落研究の新地平』

坂から曾利へー発表要旨』縄文集落研究グループ・セミナー研究会

- 小林謙一2004『縄文社会研究の新視点』六一書房
谷口康浩2005『環状集落と縄文社会構造』学生社
伊藤公明2006「古林第4遺跡」『縄文集落を分析する2006年度研究集会資料集』山梨県考古学協会
今福利恵2011『縄文土器の文様生成構造の研究』アム・プロモーション
安孫子昭二2011『縄文中期集落の景観』アム・プロモーション
黒尾和久2012「東京考古 到達点と展望 縄文時代」『東京考古』30 東京考古談話会